

師生徒相互に問答し研究して獨學自修の習慣を養はなければ、頭の練磨は到底出來ぬ。プラトリーやソクラテスの如き古賢人が如何にして自分の説を唱へ、又人を教へたかと云ふと、所謂プラトリーのデアローグ、即ち對互問答に依て、研究練磨して往つたものである。所が今日のはデアローグ即對論でなくつてモノローグ即ち獨論である。唯教師一人がすらく獨語獨講する。生徒はたゞ黙聽して居る、是れてはどうしても可かぬ。成程聽いたことは諳記するかも知れぬが、それに依つて自分の能力を練磨し、自分の天稟を發揮すると云ふことは出來ぬ。古代希臘の賢哲はデアローグによつて眞理を研究し、ソフィストはモノローグによつて詭辯せりと云ふのは此事である。どうしても雙方對論する時は論理に違つた誤謬は着々指摘せられて、本然の正理に反らなければならぬ。然るにモノローグでは、到底眞理を發見することは出來ぬ。此の如き譯であるから、其の天稟を發揮するが爲には、主として對論的啓發主義に依らなければならぬ、獨論的注入

―手を持つて教へるのでは到底駄目である。

又現に此踊に於ては、獨立にやらせる爲めに、種々なる天才が大なる發展をなして居ることは、やはり藤間藝談の中の一節にある。「踊と云ふものは、同じ踊を教へても、其人の心意氣と云ふものに依つて其踊が變つて來る。どう云ふ事かと云へば、堀越さんは三つのもを二つに踊る、さうしてあとの一つは心で踊つて居る。所が寺島さんは三つのもを六つに踊る」と云つて居る。即ち菊五郎は縦横自在賑かに踊る、團十郎は成たけジミにシブク成たけ手足を動かさずして、而して其の感情を十二分に見せることが出来る。雙方とも非常な名人であるが、各自の天稟を抑へずに、飽までも獨立的に、自主的に發揮させたものであるから、斯く反對の兩名優を生じた。又此等の名優の経歴談にも種々様々の面白い藝談がある。實に乞食でも破落戸でも其言行に注意して藝道の参考とするは感心なものである。日本の俳優は河原乞食の後身で學問も智識もないが、併し名優と云はるゝ人物は

矢張平素の心掛の厚き點に於ては大に敬服すべき點がある。此心掛は何人にも大切と思はるゝ。此心さへあれば縱令道路を歩行しても、雜談をしても、何をしやうが必ず自分に得る所があるに違ひない。即ち社會は大學校であると言ふのは是れてある。苟も自分の從事する所、自分の學ぶ所を以て、世の中に向つて充分の注意を拂つたならば、必ず社會は大學校と云ふ此語を感得することが出来る。要は今日の學校の如く、衆多の學生を一定の鑄型に入れて、之を單調化する事を避け、各々其の長ずる所に向て發展せしめたならば、儕々たる多士も排出すれば、元氣旺盛なる國民も出来る。隨分教育法にもいろ／＼の説があつて、生徒の級別法に付て學力の優劣に依る外に人にはそれ／＼の體質がある、譬へば膽汁質、粘液質、神經質、多血質と云ふやうなものがあつて、多血質の人は多く企業的のもので、隨分物事をもくろむ、時には山師など、云はれる方のものは腹の肥つた顔の赤いやうな人に多くある。膽汁質の人は喜怒哀色に現はれざる所の豪傑風の

人である。又神經質の人は人の精神を讀む事が上手で機敏だとか何とか云ふやうな事があるさうだ。近世の學校に於て學力に依つて級を分つ、云はゞ學力によつて生徒を横に分類するやうなものとするれば、之を又縦に割つて、體質の種類に従て分別する、是は多血質是は神經質さうして之に向つて、それ／＼體質に適當した所の教育を施したならば、今日の教育よりも其勞少くして其の效幾倍するか知れぬと云ふ説を吐いた人もある。それで此體質杯云ふやうな事は、今日の學問から言ふて決して正確な分類とも云へぬかも知れぬが、體質論の正否は兎に角此の如き個性差別的主義に依て、分類をなして教へたならば、其效は必ず多いに相違ない。或はそれは云ふべくして行はれぬ机上の空論としても、成るべく各個人の天性を發揮すると云ふ方法を執つて單一の模型に入れて仕舞ふとを避けたい。日本の今日の教育を見るに古い獨逸などの形式だけを眞似て來て、一向彼我の事情を酌量する事を忘れて居る。獨佛の教育では個人の發展と云ふことを考へず

して、團體の整頓を考へる、即ち兵隊を練るが如くに學校の生徒を練る故に、全體から見るとよく治まつて居るやうであるが個人に就て見ると、個人の天稟を發揮させる方の利き目は少ないと云ふことは、深く觀察した人の言ふ所である。獨逸はフレデリック大王以來國民全體を兵隊と見做して養ふて來た。それは大に國狀に於て必要かも知れぬ。所で日本も戦争後非常な御國自慢が加つて來た。成程御國自慢も宜しい我々も御國自慢は好物である、又國民の自尊心を涵養したいものである、併し空威張は宜しくない。それは萬國に冠絶した點はあるが、學問教育の事に至つて、決して天下に冠絶したなど、云ふ事は言ふべからざるのみならず、益々外國の智識を入れる事に努めなければならぬ。成程唯外國人の名を擧げて、亞米利加の誰が斯う言つた、佛蘭西の誰が何と言つたと、兎角近い者を尊ばずに遠い者を尊ぶ。よくつても近いものは輕んずる、いくら名醫でも近傍の醫者の藥は利かぬ又町内の神様はありがたさが薄いやうに思ふ。これは大に

間違つた事であるが、併ながら此思想は日本には大變な利益をなして居る。先づ封建時代に於ても自家の藩中に大學者大擊劒家があつても、態々他藩から先生を招聘して之に學ぶと云ふ風があつた。是は誠に愚な事の如くあるが、實際は之に依て自然と世間を知りて固陋に陥る事が防がれた。又日本國としても、外國の學者の言ふとを尊信して、それが爲に長足の進歩も出來たのである。英米獨佛各國の説を取て來て喜ぶ。成たけ遠い醫者から藥を貰つて來ると云ふ風が、今日の日本には誠に必要な事で、それが又是迄も此國の進歩をなした所以であらう。今日の西洋の開化ばかりでなく、昔支那や印度から、佛教なり儒教なり持つて來て、大に信仰したのが此國の開化を進めた。而して其學問は全く本店の眞似をするかと云へばさうではない、巧に日本の事情に適合せしめて來た。歐洲各國は互に隣接して居るから宜しいが、若し此東洋の一孤島で排外自負の氣風が盛であつたならば、それこそ甚しい厄運に際會したであらう。又日本の美點は勉めて保存

するは宜いが、それが爲めに、他國から智識の輸入を怠つてしまつたならば、大に國の退歩を醸す事になる。佛蘭西がどうして今日の如く衰勢に傾いたかと云ふと御國自慢が増長して、外國から智識を輸入する事を怠たからである。此事に付ては其當時ハーバートスペンサーが施せる批評の事例に就て之を述べると例へばウルツと云ふ化學者が其化學史の冒頭に *Lucie mie est rue Science Française* (化學は佛國の學問なり)と書いた如き、自惚の甚しき者として批難されたと云ふ。勿論三十年前には化學の點に於て他に勝つて居たのであらうが、何分こんな氣位だから他國の思想學說を輕蔑し、又其運動にも注意せずに世間知らずの高枕になつたのである。チェール及び其他の著者の如きも、佛國の力を誇張して自負輕他の念を盛にした其の結果は、遂に千八百七十一年の普佛戰爭に國家滅亡に瀕するの大敗を取つたではないか。佛人は最初より自惚切つて居るから、獨逸領の地圖は持つて居つたが自國の地圖は持た無かつたと云ふやうな不用意な事をした、それか

らまだ御國自慢の例はヴィクトル、ユリゴーが *Le Saurour des nations* (萬國の救世主)といふ有名な文章を書いた。佛蘭西は世界萬國の救世主であると云ふ。余は試に其文章を讀て見るとまづ巴里が世界の中心、巴里が文明の中心、巴里は世界文明の發電所である、而して二十世紀に於ては巴里は世界の首府になる、佛蘭西文の首府ではなくて列國の總首府になる、而して此世界を率ふる者は何國であるかと云へば佛蘭西だと云ふとを書いた有名な文章でははゾラの「巴里」の卷頭にも出て居るが、二十世紀になつた今日の佛蘭西の状態は如何であるか。決して列國の盟主となり、列國を統一的、聯邦國となして諸國の帝王をエルゼー宮に參朝せしめて、永久泰平の世の中を開くとは出來さうにもない。又一例を言ふと、勸業館と云ふ壯大な大建築がシャンゼリゼー街の側に立て居る。今は博覽會の場所が要るので取毀はしてしまつたが。之に就てのヌ氏の批評にも其建物の周圍に萬國の豪傑大家の名を彫付てあるが、其所謂世界の豪傑名の中に餘り名のない佛人ま

でも列記しながら、外國人は餘り書いてない、甚しきはニウトンの名が落ちて居ると云ふである。如何にも事實であつた此の如く佛蘭西人以外の事は一切勘定に入れぬと云ふは、國の進歩上に大害を生ずるは明白である。又ルーブルの繪畫館にある有名な傑作で、イングレスの筆に成つた詩聖ホマールの戴冠式の畫は世界古今の大詩人を畫き集めた者であるが、佛國の詩人ばかりが正面に出しやばつて、セックスピヤは僅に其末班に半面を顯はす計り、而してゲーテは全く姿が見へぬと云ふてある。此の如く總ての技術、總ての學問は佛蘭西が模範である、外國から何にも取るとは要らぬ、只佛蘭西から教へて遣るばかり、世界から習ふ國民でなく世界を教へる國民であると云ふ自負心が、政治にも科學にも文學にも美術にも總ての點に於いて顯はれて居る。是は佛蘭西の盛んな時に、御國自慢の目から見るとさう云ふ感じもしたかも知れぬが、併し其同時に英吉利にも獨逸にも亞米利加にも、随分えらい學者もえらい詩人も、えらい畫家も出て居る。しか

し其れには一切目を閉ぢてしまつて、世界の中心は巴里である、佛蘭西が人物の間屋で學士文人の淵藪であると云ふ自負心が各方面に於て現れて居る。即ち外國から智識を取らうと云ふ感じは全く無くなつてしまつたのである。併し其實は斯かる自惚の強い獨斷的國民は常に外國の感化を受くる必要が最も多いのである。それで、それが原因となつて佛蘭西の進歩は止つてしまつて、今日の如くに段々と衰兆を現はすとなつたのは如何にも惜しい。併し一面から見ると此時の佛蘭西に此自負心の起るのは無理はない、日本は戰爭には勝たが、勝つたが爲に學問美術の如き又商工業の如き一足飛に進む譯はない、まだ頗る幼稚な有様である。教育の如き無論大に改良すべき餘地がある。所が日本の教育を大變えらうと思ふ者がある、教育は總て日本から出掛けて往つて、世界各國に教へたら宜からうと云ふ様な意氣になり掛つて居る。成程或る國では日本教育の方法を調べて見やう聞て見やうと云ふ様な事もあり、又善い點も無論あらうが決して

こんな事を自惚れてはならぬ。之は戦後の流行に過ぎぬ。現に彼の柔術の一例を見ても、米國其他で頻りに持てはやし、一時は修身齊家治國平天下盡く柔術で行ける様な事を云て、柔術屋が大得意になつたが、二ヶ月か三月で直に其熱が冷めて仕舞て今は誰一人見返る者もないと云ふ有様である。固より柔術と同日の論ではなからうが、詰らぬ事に空喜びをせず大に門戸を開放して、どん／＼外國から智識を吸収するを努めなければならぬ。否らざれば此國の進歩は止つて、停滯不流の有様に陥るより外はないから、是は戦後の今日に於て最も戒むべきと信じて居る。そこで予は最初に云ふ通り、唯彼の微々たる所の、簡単な手足を動かす計りの踊の事さへ、今の如く獨立でなければ本統の發揮は出来ぬ者である。又人の天性に任じて發揮したならば、所謂三つの者を二つに踊るやうな濫い藝人も、三つを六つに踊る派手な藝人も出来ると云ふ。此話の如く日本國民は各方面に向つて、各々其天稟のある所に従つて發展すると云ふとにならなければ、此

國は眞の發展をなすことは出来ぬ、此國は眞の雄大を致すことは出来ぬ、即ち戦捷と共に各方面に發展して大に世界の檜舞臺に躍る所の大國民たらん事を期しなければならぬ。

六 國民教育の要件

世間の教育家學者政治家等は頻りに普通教育の普及を希望する、少くも其れに向つて不同意の人は無い、無論普通教育には小學校の設備を完全にし、又小學校の数が充分足りて居らなければ到底善い教育を普及せしむる事出来ないのである。併し學校ばかりが教育をするとは決して云はぬ、智識を授け、藝術を教へると云ふ事は素より學校直接の事業であるが、全體人の品性を陶冶すると云ふ點に至ると中々學校計りでは行かぬのである。又智識の點に於ても學校の力丈で、文明各國民の智識が開けたと思ふのは非常な間違である。先づ此十九世紀の間に世界人智の進んだのは、第一小

學教育の普及と云ふ事が其大なる原因に違ひない。併し乍ら餘り人の云はぬ事と殆ど普通教育と拮抗し得るだけの効力のあつたものがある。其れは何であるか、即ち鐵道其他交通機關の發達、其次は徵兵令である。何故と云ふのに大抵昔から一般小民の生活と云ふものは其土地に生れて其近傍だけを見て死んで了ふ、其の有様は恰かも草が生へた處で復た枯れて腐つて土になつて了ふのと同じく、其邊の山の間とか河の邊りとか僅かに視線の届く所丈けを世界と思つて安んじて居つた。其れが近來蒸汽電氣の爲めに桃源の夢を驚かされて、交通往來の爲めに見聞を擴め、僻見を脱しつつある。又徵兵と云ふ事の爲めに先づ各地の人間が一つ處へ集まつて、相互ひに交はる所からして双方の智識を開き、又國家的感念を養はれてそれを郷里に持つて歸ると云ふやうな事で、間接に非常な教育を爲して居る、之れを名づけて近世の三大教育機關と云ふても宜からう。國民教育と云へば、廣い意味に於ては頗る廣いもので其の國の人民各自が生れてから死ぬ

迄の間に觸るる所の物、接する所の事、皆教育の種でないものはない。殊に少年には其家庭、市街、湯屋、髮結床、商店、工場、公園、見世物、芝居、寄席、皆善惡の感化院である、其れ等のものが若し惡かつたならば、如何に學校の設備が完全し又教へ方が宜からうとも、其の感化力を打消す方が強い。そこで此の社會的感化力を純潔にすると云ふ事は最も必要である、夫から其國の政治組織と云ふものも非常に國民の教育に關係を持つて居る、露西亞のやうな專制政治、所謂民は之に由らしむべし知らしむべからずと云ふ流義の政治であると、國民を愚にこそすれ、又愚にすることを努めこそすれ、政治上から國民の智識を開發するとか、或は自主自製の品性を陶冶すると云ふ効能は全く無い、自由の政體、憲政の行はれて居る國になると國民が政治上の事に努めなければならん義務を持つて居る、即ち人民が各自國家の重きを荷つて居ると云ふ責任の感念を持つて居る、小にしては町村、中には府縣、大にしては國家の參政權即ち議員を選舉し

たり陪審席に列する杯の事は國民に有益なる知徳の教育を興へる。随つて常識と判斷力を養ひ且つ國の利害と個人の利害の一致點を自覺せしむるの効をなすは、彼の先進國の現に例示する所である。我日本も既に憲政主義に移りはしたが未だ其利益を收むるの多さに至らぬは予の常に歎息する所である、併し又一方より見ると大に將來に有望なのみならず、既に其の効果の顯はれつゝあるは日露の戦争に於ても慥に見る事が出来るではないか、それで今後愈々歩を進めて從來の弊風を矯正して、此政治的感化を健全にするが大切である、又新聞雜誌小説杯も頗る大なる影響を爲すものであるが、此等文學的感化力が健全なれば、自然と國民の品性が高尙に赴くは明かな事で、其最も羨しいのは先づ英國の新聞である、新聞紙が賄賂を取つて夫が爲に説を左右すると云ふ卑劣な事はあの國には餘程少ない、説を左右すると云ふ程大きな事は無論、何か一寸した事でも中々金の力で行かぬ、或る米國の富豪な旅行者の話に伊太利に到つた時、少しく自分を

交際社會に吹聴させようと思つて、自分勝手な原稿を綴つて、それに二十フラン計りの金を封入して重なる新聞社に送ると、翌日は麗々しく書立てゝ、其上返禮の書面迄よこした、其くせ封入金何事も云て居らぬ、倫敦ではとても此んな事は出来なかつた、尤も二三の新聞はそんな事をやらぬでもないが非常に金が高い、一寸一千磅日本の金で一萬圓以下の金では此劣等新聞でも提灯は持たぬ、之はしかも英國嫌ひの米人の言である。予は之を聞いて、大に羨しく思ふたが、日本多數の新聞は伊太利流か將た英國流か、其分類法が今に附かぬ。新聞は純潔獨立であつてこそ社會の木鐸として國民を指導するの權威が付くのである。それから稗史小説が大切で、貸本屋杯の改良は最も必要な急務である、矢張英國では此小説の如きも決して野卑な猥褻なものを市中に賣るような事もなく、又汽車の中でも斯の如きものを讀む者は同乗客から斷られる、宮中に於ても、先きのヴィクトリヤ女王は佛蘭西の小説を決して讀まれなかつたと云ふ事は有名な

話になつて居る、佛國古今の文豪フロザール、モンタンニユ、ラフォンタ
ン、ペロルト、モリエー、デドロ、バルザック、ユイゴ、レナン等の名
文も女王の眼には一塊の反故同様であつたと云ふ、其の理由は唯一點、佛
蘭西の文學は兎角淫猥であると云ふので避けられたのである。是杯も自然
民間に善い感化を及ぼした、而して學校の教育だけに於て如何と云ふに、
英國は遙かに獨逸に劣つて居る、殊に智育の點が劣つて居る、獨逸の學校
は英國より遙かに進んで居ると云ふ事は確な事實である、殊に職業上の教
育に於ては獨逸人は近年大に進歩し其上、給料が廉くつて能く働くので、
英人は追々仕事を奪はれる、英人の本城たる倫敦に於てさへ獨人の入込ん
で身を立つる者は夥しいもので之を名けて獨人の侵入と云ふ。そこで英人
も大に狼狽して職業教育の設備に勉むる事に成つて來た、彼の徒弟教育即
ち丁稚、子僧、手間、弟子杯云古風な養成法は流石に保守的の英人も追々
止めにして商工學校に依らなければならぬと云ふ事になつた。英人固有の

品性に此知育が加はれば、それこそ鬼に金棒である。而して此個人の品性
陶冶の點に至ると、獨逸は餘程劣つたもの、全體獨逸の方針は團體として
の整調を圖る事に力を盡し、又英國は個人の品性を陶冶する方に行届いて
居る。獨逸の學校の仕組では一の學級とか云ふ團體の整調にのみ務める、
其有様は政治上國家の組織を整頓する事を努め、其個人が夫程に發達して
居らぬと云ふのが丁度學校にも反射されて居る、但し學校の教育が社會に
反射したのかも知れぬ、英國の教育は團體の整調よりも個人の發達に力を
盡すが爲に其結果は自ら團體としても能く秩序が立つと云ふ風になつた、
此兩國の長短利害は日本の大に参考すべき事であつて、日本今日の教育は
何方に傾いたかと云ふと團體の上に於ては大に力を用ひて居るが、個々の
品性を陶冶するの點には甚だ盡されて居らぬ。素より國民教育として團體
の秩序を整へる事は大切には違ひ無い、それには兵式杯は團體規律を重ん
ずから甚だ宜い、併しながら其一面に於ては此團體教育の爲に個人として

の判断力、個人としての自治力を失はせぬのみならず、益々夫を發揮する事をも兼て努むるのが非常に大切である。元來人間には總て他人の事を模倣し又同じ事を繰返す性が殆ど自然に備はつて居る。尤も反對する力も備へて居る。そこで某社會學者は人類社會の成立は模倣力、繰返力、及反對力の三つに依ると云ふ、模倣、反覆の此二つは社會の秩序を立て習慣を作り、遂に國體を完成すると云ふ上に於ては主要の力である。併し此作用だけでは或程度以上に進む事が出来ぬから、そこで反對する力、其社會全體から違つた傾向を有する分子が現はれて來て、固有の狀態に反對する爲に社會に進歩と云ふ作用が起る。即ち舊來の習慣を破つて新しい事を遣り出す所の反對力である。而して個人に就て見ると模倣力、反覆力の方は一般普通の人間に多くつて、反對力の優れた者は或る少數の人に限り、反對力の優れた者は社會進歩の醗酵素ともなり、又其人自身も社會の偉人とか豪傑とか云ふものにもなるが、又悪く行くと所謂變人、奇物として一生を終

る者もある。モウ一つ悪く行くと罪人とか悪徒とかになる者も此中から出る道理、しかし此反對力の方は少數で一方の眞似をするとか繰返すとか云ふ方は教へずとも、既に大多數大勢力を占めて居るものであるから、餘り團體の整理のみに力を盡して、個人の特性を發達せしむる事を怠ると、此反對力即ち進歩の種子を失つて了ふ恐れが起る。此個人性の消長より生ずる利害得失は、日露戦争に依つても、明かに證明されて居る。露西亞の兵隊は決して悪るゝ兵隊でない、體格も好く體力も強い事は無論、規律も随分正しい、上官の命令に服従する事は最も強い、併し乍ら個人としての判断力は殆ど皆無である、大體の規律とか方針とかに随つて運動する事は立派に遣り得るか、物に當り事に觸れて幾分か自己の判断をも交へて遣る事は全然不可能、即ち獨斷專行の働さが少しも付かぬ、之に反して日本人は全體の方針全體の規律の範圍内に於ける獨斷專行の判断力、臨機應變の活用方を有するが爲めに、この一點で彼我の勝敗が分かれるようである。是

は古來日本の教育、殊に武士教育の如きは皆勉めて個人としての働きを養つたものである。是が西洋の團體的兵式訓練と合して今日の利益をなして居る。此の最も團體的なる戦争に於てさへ既に此の如しとすれば、戦争以外の人事に於ては尙更の事である。然るに現今の教育は殆ど團體の上に止りて、個人の方は餘り構まはぬ傾きである、即ち餘り獨逸流に傾き過ぎるのは甚だ危険なことと思はれる、獨逸の國風は大小共に兵式的であつて、日本に向てこれを輸入するは頗る間違つた事である。此の風は何時から起つたかと云ふとフレデリック大王から始まつた、大王は總て國民を兵隊の如く馴らして了ふと云ふ考で教育を施した、其の教育たるや國民を一定の規律に従ふようにしやうと云ふ考が頗る強かつた、過日或人の話に伯林の町に水を撒く人足は、水撒の時刻が來ると縦へ雨が降つて居ても平氣で水を撒く、誠に感心だと云はれたが、予は甚だ感心せぬ。成程規則通りに水を撒くと云ふ事は非常に善い事である、雨中の水撒は規則の形には叶つて

居るが、規則の精神には違反して居る。如何に下等の人足でも日本にはこんな馬鹿は居らぬ、これは全く兵隊流教育の餘弊に過ぎぬ。否、兵隊としても今少しく融通がさかなければ戦争は出來ぬ。況んや戦争以外の百般の人事に當るに於てをや、今世間で法律家が法律を楯に取つて色々馬鹿々々しい杓子定規の議論をすると云ふのも、畢竟法律の精神を味う所の餘裕が無くつて、法律の條文だけを只其儘に遂行しやうとするからである。日本の法律家は多くは雨天水撒き人足に外ならぬ、是等は皆相關聯した所の事柄であつて、教育に就ては此の邊の注意が大切である、決して團體さへ善くなれば能事終れりと云ふ譯には行かぬと思ふ。道徳の方から見ても古の社會では總て一種族全體の連帶道徳である、即ちトライバルモラリティである。神に對する所の務も一種族全體が罰を蒙ると信じて居つた、又一人が神の爲に犠牲になり、人身御供ニギハヤヒに上がると全體の村落が助かると信じて居つた。一人の穢多が伊勢の大廟に參詣したが爲めに、大廟から火を發し

て山田の全市か焼けたと云ふ話がある。法律に於ても罪九族に及ぶと云ふ、成程太古の社會には團體を責め個人を無視して其責任を問はない所の道徳が必要であつた。所が段々世の中が進むと左うは行かぬ、そこで道徳も變遷して個人の責任の方に傾いて來たのである。即ち獨立自尊の主義を以て、文明國民の道徳としなければならぬ世に成た以上は、國民の教育は其團體の秩序に力を盡すと同時に、此一方に偏傾することなく個人としての發達を忘れないのみか、益々之を發展するが肝要である。要するに學校の教育として此二要件の並行を求むると共に、學校以外、社交政治文學等の各方面に於て國民の教育に健全なる感化を與へしむるの計を爲すは先覺者の務めであるとするは信ずる。

七 體德兩育の結合

西洋の遊戯競争にフエヤプレーと云ふ事を云ふか、此のフエヤプレーを日本の武士道の言葉に譯すと、尋常の勝負と云ふことであらうと思ふ。先づ諸外國の教育上には各々長短があつてそれ／＼變つて居るが此體育の事に至ると英米の諸國殊に英國の學校は最も勝れて居ると云ふことは、英國人自から云ふのみならず、歐洲大陸の國々も皆許して居る。従つて體育と共に體育が能く出來て居ると云ふことも許して居る。單に體育と云へば身體を強くし、身體の發達を助けるは無論當面の目的であるが、ソレと同時に體育が結付られて居る。體育と云へば面々の意思を鞏固にして品性を高尚にするに云ふことである。此二點に於ては佛蘭西も獨逸も到底アングロサクソン人種には及ばぬ。學理を深く研究するとか又は知識を汎く求むると云ふ點に於ては、ソレ／＼勝れた所があり、殊に教育の普及は英國より優つて居るが、體育、德育の點に至ると重もに英國の風に倣つて遣らなければならぬと云ふことになつて來た。それで爰十年前に比べて、大分其面目を更めた様である。大に體育を盛んにし、ソレと兼ねて德育を盛んにしな

ければならぬと云つて居る、而して干渉主義の弊として個人の自治自營獨立獨創の氣象を銷沈せしめたから、此の氣象を鼓舞しなければならぬと云ふ議論が大分起つて來て居る。英國では學校も社會も運動競技を盛に遣る、學生も、一般人も大に遣る、殆んど午後新聞とか夕刊新聞とか云ふものは大抵此の競技の記事で満たされて居る。買う人も外の記事を読む爲めなく此の勝負を讀む爲に買うと云ふ有様で、中々盛んである。殊に學校でも午後の時間と云ふものは學科の方をやらずに、大抵運動の方に當筈められてあつて、其の間に盛んに運動して身體を強くする。其の中に自然々々と徳育上の感化を受けると云ふ事になつて居る、例へば先づ教師が自分の家に書生を預つて、私家教育をして居る、其の先生の所へ往つて見ても先生は朝から運動服を着て居る、サウして時々小供を集めて盛んに運動事を遣る、其の間に自然と教師生徒の間又た生徒相互の間に心情を融和して、同情の念を生じ、親愛の情を養ふと同時に、徳義の制裁を感ぜしむるのであ

る、その感化力を及ぼすの強き事は非常なものと見へる、その大主義は何であるかと云ふに、遊技をする人々相互の間にフェアプレー即ち尋常の勝負、苟くも勝負の間に卑劣な事をしてはならぬ、又人の弱點に附込んで自分の利益をすると云ふことが非常に悪いことになつて居る。只自分の力のあらん限りを盡せ、凡て事をあろそかにすると云ふことはゴク悪い事で、假令力が足らなくても又力は弱くても自分の有らん限りの力を盡して、其上で負けたらば此負けたのが決して耻にはならぬ。假令勝つたからとても人の弱みに附込み、人の隙をねらつて卑劣な事をして勝つたのでは決して本當の勝てはない、却て立派に負けた方がましだと云ふ事を信仰せしめるようである。此精神が染み込んで成人の後社會に出て、政治なり商賣なり又交際なり遣つて行くのだから、立派な事が出来るのである。只極り切つた修身の講釋だけをして、それが徳育であると思つて居る様ではとても効能があるものではない、何でも實行的の習慣を付けるのは、此の體育と徳育の結

合法が第一の様に思はれる、これで以て學校の輿論を作り、學風を拵へて自然々々に之に化せられるのが最も強い感化である。

日本に於ても近來此體育論も盛んになつて來た。德育論も盛んになつて來た。各學校でも此節はいろ／＼の遊技を盛んにし運動法を奨励して居る、又其學校と學校の間にも試合をして勝負を決すると云ふことが大分盛んになつたは大いに悦ぶべき事である。悦ぶべき事であるが、マダ甚だ不完全の點があると云ふのは、此體育が德育と密接の關係を持つて居らぬ、殊に其勝負の間に尋常の勝負を尊ぶと云ふ氣風もまだ盛んに起つたとは云はれぬ。殊に對校勝負にても成ると此氣風が一層乏しくつて、甚だしきは負けたり口惜さに復讐心を持つて喧嘩するとか敵討ちをするとか云ふに至ては、全く此體育が德育と何等の關係を持つて居らぬ、體育と德育と少しも結び付かない、然らば此日本では此結合が行はれぬかと云ふに決してそうでない。予は充分行はれる見込があると思ふ、事に依ると英米杯よりも今に此

點に於て遙か進むことが出来るであらうと思ふ。何となれば日本封建時代數百年の武士の教育と云へば、取りも直さず、武藝に依て身體を練ると同時に信義と禮讓を教へ込むだ所は全く體育の中に德育を包含せしめた者で、武士に二言なく又卑怯未練の事を賤んで、尋常の勝負を貴ぶの教であつたから、或は英國よりは此の日本の方が先覺かも知れぬのである。獨逸佛蘭西あたりでは頗る智育の方が進歩したが、ドウも此德育體育の點に至ると英國には及ばぬ。又アングロサクソン人種が天下に雄飛する所の基はドウに在るかと云ふに、ドウしても身體が達者で活動力が熾な、其上に信を重んじて商賣にも正直を最上の政略として居るのが、全く世界に雄飛する基になつて居る。是非國を盛んにするには此氣風が盛んにならなければならぬ、然るに日本は世界強國の仲間入をし新文明國として大に顯はれんとするに際しこの德育の點に至ると政治上、社交上、商賣上に於て大に其缺點のある事を見出して來た、これは數百年の武士教育は重もに武士の間への

み行はれて、商工社會には縁のない者と思ふて居た、商賣は只錢をもうけさへすればよい、商賣工業の如きは武士の爲さるる賤しき業であるとしてあつたから、實業上の事に至ると餘り信用を重んぜぬと云ふ不都合が生じて來て居る。しかし日本に數百年來の素養がある、即ち日本の武士道、武士は尋常の勝負を尊ぶ、決して敵を暗撃ちにすることはならぬとか、弱きを扶けて強きを挫くとか、又は武士には二枚の舌はないとか云ふやうな金言もあれば傳説もあつて久しい間武士の氣象を練つたから其魂が全く消滅する譯はない、これは必ず遺傳して居るに違ひない、今それを喚起しなへすれば宜いのである。僅か三十年の間に數百千年間に養成したものが消滅する氣遣ひはない、現に小説を讀んでも芝居を見ても此の氣風の盛んなことは能く分る。又其芝居を見て感動する、其小説を見て悦ぶと云ふとは即ち面々の頭に其氣風の盛んに閉籠つて居る徴であるからして、之を喚起しなへすれば宜い。日本は此點に於て獨佛等の諸國に勝るゝのみならず、英

米の人種に對しても優ることが慥かであると思ふ。

然るに武士の教育は軍人道德として武士の間のみ行はれ、戦争丈は立派であるが、其外一般の事になると甚だ情けない話で、決して此點に於て我々日本人は威張る譯には行かぬ、諸學校の學生達の運動は單純に身體の運動と思つて居るから未だ餘程幼稚である。英國の運動の勝負は先づ第一に審判官の審判を尊重して、之に不服を唱る事を許さぬ、之は誠に大切な事で、此氣風か社會全體を支配して政治實業の上に起れる事柄も皆此通りに遣つて居る、然るに日本の社會に審判尊重の乏い事を云へば過般某々二會社の間に生じたる葛藤を訴訟にせずして民法の新規定に従ひて仲裁人を撰んで捌きを附けた、所が一方が故障を言ひ立て、其の審判に承服せぬが爲めにこの新規定を初めて實地に應用しながら遂に之を無効に歸せしむるの悪例を残したと云ふ事も新聞に喧しく書いてあつた。されば學校も會社も共に審判を尊重せぬ惡風を持つて居ると云はれても仕方がない。ソレを少しも興

論が咎めぬ所を見ると、折角數百年間に養成した氣象は何所に行て仕舞たか分らないようであるが、併し是れは氣象がなくなつたのではない、全く今の運動を昔の武藝のように考へず、運動と云ふから只運動すれば宜い、只人のすき間を駈け抜けても人より早ければ宜いと云ふやうな事で、軽く見て居つた弊である。昔の武士が弓馬劍鎗の術を學んだ其間に、所謂武士の氣風が薰陶せられて行つたが爲めに、武士は他の三民に立勝つて居つたと同じ事で、英吉利の人間が世界に向て斯の如く盛に權力を振つて居ると云ふことは、矢張り運動法の中に德育が含蓄されて盛なる體力を以て未開の山野を跋渉する上、確固不變の氣象を以て地球上の各地に殖民し、商業を營むが爲めであることと云ふことを悟たなら、我々日本人が數百年間に磨き上げた武士道を、今日思出してこれを實際の運動法に交へて、學校も之を獎勵し學生面々も其精神で遣り、又世間一般も此武士道を交へた運動法を盛んに行たならば、則ち此德育と云ふものが體育の中に籠つて、二者同時

に助長して往くことが儘に出来るだらうと予は信ずる。然し斯く云ふものは封建時代の武士と今日の文明實業の社會とは、其守るべき道は自から違はなければならぬ。予は只體徳兩育の結合が恰かも武藝のようになりたいものだと思ふ丈けて決して全然彼の通りに遣れとは云はぬ。唯獨立自尊の大義に基いて、卑劣卑怯の事や信義公平の道に反するような事を遊戯運動の間にも撥斥して、審判と云ふ正當なる權威には欣然として服従するの美風を養ふに在る。決して盲從阿諛不信の舉動に依て自己を利し他を傷ふ事をせず、又之を爲す者は嚴重に制裁を加へて共に齒いせぬと云ふ流義に遣りたい者である。今天下の學校を見るに、德育の事は文字や講釋にはあるが、これは只筋書を示す丈けて、誠に効能のない者で殆んど役に立たぬ。昔の武士の道徳も、論語の講釋よりも武藝の鍛鍊から來て居るかも知れぬ。決して只講釋や説法を聞いただけでは德育に成らぬ、人々皆行ふ所の舉動の中に始終此德育が附いて廻つて習慣となり、遂に其神系に同化されなけ

ればならぬ。造次にも頓沛にも此徳育が附いて廻らなければならぬ。日々
の勝負、運動、遊戯に依て此徳育を實行するが最も簡便で最も有効である。
徳育の方法は講釋も談話も無論必要ではあるが、此體徳兩育の結合こそ最
も有効なる實地的のものゝ一である。

八 文部の方針と教科書事件

全體政府の本能とか權域とか云ふことに就ては、色々議論もあり又社會主
義個人主義など云ふ立場から、大にその意見を闘はすものもあるが、常識
の上から見ても或る開明の程度に於ては大に政府の干渉を必要とする事も
あり、又不要とする事もある。兎に角今日の日本では此の干渉の餘り過度
なるが爲めに、大に進歩を妨げて居る様である。素より國民の權利は憲法
に依て保障されて居り、又之に基て制定された法律で規定されて居るから、
苟も其範圍を脱せぬ以上は面々自他の爲めに害にならぬ事ならば、自由に

之を行ひ之を營んで宜い譯であるが、實際は中々そうは行かぬと云ふのは、
其法律の條項に付ても其施行規則とか實施方法とかは當局大臣之を定むと
なつて居るから、事實は行政官の爲めに勝手に左右される。そこで人民が
當然なすべき事でも官許を受けねばならぬ。さうすると此點が行かぬ彼點
が悪ると云て其手續の煩る煩雜なるが爲に時日を費し勞力を費し金錢を
費すことが少からぬ。夫が爲めか諸種の計營にも創立費とか交際費とかいふ
項目が案外大きくて、相當有利な事業でも思ふ様に利益の配當が出来ぬ者
が多い。此創立費といふのは本當に其事業を打立てる爲に入るのではなく、
之を打立てる手續を了する迄に費す所の運動費。此動費と云ふ辭は色々面
白い意味を含んで居るが、之が尤もらしい名前で無遠慮に帳面の上に出て
居る、兎に角今の仕組は賄賂、賄賂と云ふと穢くなるが官吏にも民吏にも
俸給以外の収入の爲めに都合の好い仕組になつて居る。而して此等有形の
營利事業のとはまだしも忍ばれるとして、どうしても忍び得られぬ有害無

益の干渉は無形の精神上教育上妄りに行政官の干渉する一條である。成程文部省は就學の督責とか統計調査とか内外の教育制度の取調杯をして新知識を紹介して教育者一般の参考に供する等の事に盡力する筈であるが、之等の事はそつち除けにして、否之をするにも杓子定規の事計りて厄介を掛けるのみで、官吏を海外に派遣して調査したと杯は一向世間へ發表した事もない。試に歐米諸國の教育報告杯を見るがよい、米國政府は彼の立派な報告を我々外國人にも團體には無代價で送つて呉れる、その内容の豊富な事は驚く外はない、素より此んな事を今の官府杯に望むのは無理な注文であるが、先づ出来る丈の事でもして國費を使つた百分の一をもするがよい、それも強ては望まぬが、どうぞ出来るなら餘計の干渉を止めてもらいたいのである。彼の教科書事件で學校の先生が珠數つなぎになつて教育界から引張り出されたと云ふのも畢竟教科書に付て餘り入らぬ御世話の焼過ぎが大に手傳つて居る。全體彼の教科書檢定と教科書審査と二の關門を設

けたのは、最初の主意はよい積りには違ひないが、實際は賄賂の税關になつた。茲によき譬へを擧げると予が朝鮮で聞いた話であるが朝鮮の百姓が十圓の税を拂ふ爲に役所に行くと先づ表門番に十圓、中門番に十圓税吏の受取證を取るのに卅圓都合六十圓取られると云ふ。十圓の納税證を受くる爲めに五十圓の入費が掛る。日本の教科書運動は恰かも之と同様で二重の關税を拂ひて及第し其入費は書籍費と成て皆な百姓の頭に分課せられて居る、丁度教科書の本屋は、賈札を拵へるのと同じ事て甘く行けば紙切れが黄金に化け、やり損へば首の臺に上るのであるから、此の檢定の表門と審査會の中門とをくゞり抜ける爲めには殆んど手段の善惡を擇ぶ暇はないと云ふ位の惡商賣になつて了つた。而して相手の内には金もなく節義もない學校職人もあるから賄賂には逃へ向である。干渉の餘弊が斯く成たるのに、當局者は之を以て干渉の弊害なりとはせず、却て監督の行届かぬ爲め干渉の不足なるが爲めであると思ふてか、今度は檢定よりも審査よりも一層えら

い國定と云ふものを擔ぎ出した、國定で賄賂沙汰が止むかと云へば唯形を換へて出直す丈で、何の役にも立たぬ事は夙くに識者の云ふ通りである。よしんば賄賂が止まるとしても之が爲めに假名遣或は歴史上の事柄と色々の面倒の生ずる話である。或は腐敗を止むる計りが目的でなく、教科書其物を改良する爲であると云ふか、予は遽かに之を信ずる譯には行かぬ。第一國定とか何とか名前は大きいが、文部省の二階で作るのと本屋の二階で作るのと大して變らうとも思へぬ。此の國定と檢定との相違は單に程度の相違で、種類の相違でないから、此檢定が頼みにならぬとすれば、國定も矢張頼みにならぬとは自明の道理である。予が二三年前に當局者に向て質問した事がある、文部省が檢定済の者に限りて用ひさせる檢定以外の書物を一切使はせぬとは全體どういふ主意で有と尋ねた所が、彼れは第一道徳に違背した者や第二誤謬の事實を傳へる恐れがあるからだと答へた。予は反問して第一に道徳に反するとは誰もいやであらうが、政府の役人に限つ

てその見分けが付き、世間の學者には分らぬと云ふ事ならば夫迄として、第二に事實の誤謬は檢定に依て除かれて居るや否や、其最も有形にして正否の争はれぬ者は地理書であらう。その地理書の最近檢定済の本を見る所が檢定本に間違つて居る事柄の二三を云つて見れば、其地理書には第一阿弗利加洲のことを暗黒大陸と云て未だ内地の探險の行届かぬ所であると書いてある。今は彼の通り歐洲列國が入込んで、寸地も餘さずに占領し、北端より南端迄鐵道を布き詰めようとして迄云つて居るではないか。然るに之には四五十年前の書物其儘の事を書いてある。又第二に匈牙利を歐洲中の未開國としてある。これも四五十年前の書物を直寫しにした爲めらしいが、事實は全く反對で近來は長足の進歩を爲し、北米合衆國中の諸地方と同じ速度を以て進むのは、歐洲中此國計りであるとは三歳の童子も承知の事である。第三に希臘のコリンス地峽の切開と云ふ著名の事實を認めて居らぬ。此切開は埃太利人の設計で羅馬のシイザア以來希望の大工事を成功したの

て、埃國のトリエント港から希臘のパトラス港迄の間に、五百八十海里の得になると云ふて評判の高い地理上の新事實であつて、此檢定教科書より以前に出来た西洋の地圖と雖も皆此所に朱線を引て新運河の所在を示してある。第四に佛國の南部にモナコと云ふ所がある。これは珍らしく小さい國だと云ふので名高い。その長一哩餘その幅五百ヤードの一村落ちて而かも一公國となつて居る、所が之をも十五方哩の最小共和國と書いたのは、是も伊太利統一以前の幅員を其儘書いてあつて、現状とは大に違つて居る、實は佛が伊を助けて埃に向はしめて伊の統一を遂げさせたのを恩に衣せて、その邊を佛にもらひ受けた此沿革は外交史上著名の一大事實として人の熟知する所。其上にモンテカルロは世界の共同博奕場として有名な所ではないか。しかし此んな小さな所は小さい爲めに間違つたと云ふかも知らぬが、あの大きな阿弗利加を暗黒大陸とは驚くではないか、それでも檢定本でなければ誤謬を傳へる恐れあるとは如何の理由であるかと問ひ掛けた所が、

當局者も大に困つた様であるが、それは全く間違はないとは云へぬ、内務省の試験した賣藥にも有毒なものがないとも限らぬからと逃げた。之に由て見れば檢定は甚だ當てにならぬから隨て國定も當てにならぬ、檢定官が國定官と辭令をもらひ換へたからと云てそんなに換らう譯はない。そこで予の意見は教科書を自由撰擇に任せて仕舞ふのが一番よいと思ふ。無論それて惡弊全滅とは行かぬ。而して檢定は全廢と行かぬとすれば、今少しく公開方法を用ひ又は官報や新聞雜誌の批評を盛にし書物の良否を審判して世人の参考に便ならしめては如何。成るべく書物の善良と價格の低廉を以て競争するやうにし、眞の商賣的競争に近くなつて來なければならぬ。予の國定を否定するのは以上の道理のみでなく全體に今の教育主義は甚だ宜くないと信ずる。その間違つた主義を國定教科書とやらに無暗に詰込んで、一手販賣の押賣をやられては、從來の陋習を改める所ではなく、愈々益々固陋偏狹の一方に導き間違つた薰陶をして第二代の國民を過るやうなこと

になる。希くは此收賄事件の破綻を好機として大に方針を改め、現今の惡制を廢してその過失を天下に謝しなればならぬと思ふ。尤も現任當局者ばかりが悪い譯ではない、全體に此迄の方針が間違つて居つたのであるから、予は或人たちの如く無差別に現任者の罪を責めその引退を迫まる考はない。何人にも從來の謬見を去て日本の教育を文明の進歩主義に引直さうと云ふものに同情を寄せるのである。斯る醜體を演ずるその本因は徳義の低度なるに在るは勿論であるが、其の誘因は制度の不良に在る。故によく此邊に着眼して遠近の兩原因を除く事に勉めなければならぬ。近來の如く土木教育諸般の方面に腐敗が行渡り居ては子供が家を出て、學校に行く迄には先づ賄賂で出來た道を踏み、賄賂で出來た橋を渡り、賄賂で出來た學校に登りて、賄賂で極めた教科書を讀む内に、先生が賄賂事件で引張られると云ふ。此んな境遇に圍まれて出來た第二代目の國民は思ひやれる。諺にも境遇は人を作ると云つて居るではないか。

九 讀書の活用

英佛獨の三人が雜談をして居る所に、象と云ふ動物は全體如何なるものかと云ふ問題が起つた。獨人は早速文庫へ入て百科全書を引出した、佛人は直ちに出て、動物園に到り象を見、英人は勿々旅裝を整へて態々印度へ往つて象の實狀を觀察したと云ふ。これは曾て或先生から聞いた一場の小話であるが、如何にもよく各國人の學問に對する思想の特徴を言ひ盡して居る。乃ち甲は讀書的、乙は參考的、丙は實地的である、そこで予思ふに若し日本人が其一坐に居つたならばどうしたらうか、彼は必らず人に乞ふてその説明を聞き、一々之れを鉛筆で紙の上に書き留めたに相違ない、それはよいが一讀もせず其の儘箱の底にしまつて置く、そしてサア明日は象の事が試験に出ると云ふと、この書付を引出して夜の眼も眠らずに之を暗誦し、眼の縁を眞赤にして試験に答へて漸く濟むと、あとは丸で忘れてし

まふ。もしもそれは餘り日本の學生を見くびつた酷評だと云ふなら、何所か法律學校邊の講堂に行つて見れば、思ひ半に過ぎるであらう、素と學問の目的は知識を得て、よく之を消化し之を概括して眞理の探求に資し、又之を活用して事業を經營する筈でなければならぬ。之が爲めには讀書も必要なれば、實物の參考も大切だが、最も肝要なのは之を實行的にやると云ふ事である。然るに日本人は詰込主義に制せられて居る上に、兎角試験、肩書、資格と云ふような點に重きを置く所から、益々受驗的に暗誦するのみになつて來る。是は社會の風潮も國家の制度も共にその宜きを得ないからであるが、差當り讀書丈でも甘くやつてもらいたい。素より讀書と云ふ事は夫程偉らい事ではない、高が先人の見聞を白い紙の上に黒い文字で印刷した丈のものであるから、これを只べら／＼讀んで覺へて居る位では何の役にも立たぬ。去ればとて決して此讀書を輕んずる譯には行かぬ、殊に日本の現状にては大に之に依頼するの必要がある。學問の參考となるべき

諸般の設備が一向に整はぬ。博物館、動物園、植物園、天文臺等の有形的設備を初めとして、一般の社會の狀態が甚だ幼稚であり、殊に歐米諸國とは甚しく隔絶して、文明の風潮に後れ遠かるの恐れが多いから、先づ最も容易なる讀書こそ、我々の益友として愛敬せねばならぬ。しかし只之を讀む計りて、消化もしなければ概括もせず胃弱の馬が矢鱈に豆を喰ひ込んだ様に、無益の知識がごろ／＼して居るようでは害こそあれ、何の役にも立たぬ。昔支那に偉らい大學者があつて、何でもかんでも讀まぬ本はない。或夏の日に眞裸で大の字なりに寐て腹を出して居るから、門弟子が恐る々々大先生にその譯を伺ふて見ると、乃公の腹には萬卷の書を貯へてあるから今その虫干しをして居る所だと、云たさうである。萬卷の書を腹に貯へるもよいが、虫干しを必要とする様に書物がその儘腹の中にごろついで居るようでは實に困つたもので、諺にも云ふ如く藏書家必しも博識にあらず、博識家必しも大儒にあらずで、却て往々その反對を見ることがある。併し

前にも云ふ如く強ち讀書を輕んずる譯には行かぬ、只肝要なるは務めて之をよく消化し概括し分解し又之を活用する事である。その活用の事に付て爰に面白い一例がある、彼の佛國大革命の後に於て、佛國政府が外は各國を打靡けて全歐に武威を輝かし、内は弊政を革新して諸般の施設をなし、文武共に有形の功業は盡く舉りて餘す所なきが如くなれども、これ皆共に永遠無窮の事と云ふ可らず、是非共此機に乗じて神聖なる學問上に大事業を遂行したらんには、假令此佛蘭西國が地球上に存在を失ひたる千萬年の後とても、歴史にその芳名を残さんこと、恰も彼の古昔の埃及の幾何學に於ける、希臘の哲學に於ける、羅馬の法律に於けるが如くなるべし、と云ふ大々の野心を起した。所で此頃度量衡の舊制を改めて十進法を採用したる行懸りもあり、爰に此十進法の適用に資すべき大對數表を編纂すべしと一決し、國中の大數學者及び哲學者を召して委員とし、プロニイ博士をその委員長に命じた。そこでプロニイ博士は委員と共議して弧度及角度、對

數表を編製し、且つ舊來の直角九十分法を改めて之を百分法となし、以てその表の正確なること古今萬國に比類なく、且つ世界に於ける算數學上の最大紀念碑たらしめんとの意氣込てあつた。而して之に添ふるに一より二十萬迄の各數に付て對數表を編製するとは、是非ともやらなければならぬと云ふことになつた。所でよく／＼勘定して見ると幾多の數學者の助力を借りても、中々自分一生涯には出來上らない程の大事業である。これは困つたものと先生大當惑で日夜怏々として居つたが、一日鬱散の爲め市中に散策を試みた所、ふとある書林の店に近頃倫敦出版の英人アダムスミスの富國論と云ふ奇麗な新本が出て居るから、何氣なく之を取つて開けて見ると、その中の分業論と云ふ所に針を製造する手数が十八に分業されてる事が書いてある。先生その一頁も讀むや否や、はたと膝を打つてこれぞ天の助けといはぬ計りに其儘書店を立去つた。途中つらく／＼思ふに吾が對數表も亦た彼の針の如くに製造すれば誠に容易なり、さうじやく／＼と獨りうな

づきながら直に、田舎の別荘に兩三日滯留する内に其方案を考へ出したから、又々巴里へ出掛けて来て彌々仕事に取懸つた。その方法は此の仕事を三部に分割して、第一部には第一流の數學者五六人を置いて先その範式を作らしめ、而かも範式は成べく多數の人が同時に計算するに都合よき様を作りて之を第二部へ廻す、第二部にはよく數理に通じたる者七八人も居りて、第一部より受けたる彼の範式を數字に引直す、是も中々容易ならぬ仕事だが、これが出來ると直に第三部へ廻はす、第三部には六十人乃至八十人の計算方があつて、此多數の計算方の手にて第二部より受たる數字を加減乗除して第二部へ返却すると、或る簡便なる方法にて其計算の正否を試めず。爰に面白き事は第三部の多勢の人間は、僅かに加減乗除を達者にやると云ふより已上の知識なく、給料も誠に廉にして而かも計算の確かなること大數學者に勝る萬々である、之が爲めに第一流の學者は全く此機械的計算の勞を免かれ、第二流は随分面倒なれども其仕事に幾分かの興味あり、

此分業法に依て出來上りたる製作物は十七冊の大版の對數表であつたと云ふ。最初にプロニが此の名譽ある大事業を囑托されて、殆ど寢食を安んぜずに心配し幾ら考へても考へ付かなかつた程六ヶ敷かつたのが、偶然一冊の書物を手にした爲めに名案が胸中に湧き出したとして見ると、讀書も時に取りては非常の機能のあるものである。しかしこれはプロニが一生懸命に考へ何かよい工夫もあるまいかと、耳目を鋭敏にして注意を配はつて居つたが爲めに、此の大利益を得たのである、平生ぼんやりとして居る者がぼんやりと本を讀んだ丈で、活用の心掛のないものは幾ら讀んでも皆なぬけてしまふ、よしんば腹の中に溜つて覺へて居るかも知れぬか、それは何の爲にもならず只頭を錯雜させる計りである。乃ち前に云ふた支那の大學者は蟲干しを要する迄腹の中へ書物を詰込んだが、その萬卷の書は恐らくは生涯何の役にも立たなかつた而已か、物知り顔の種となり不平の病源となつて、遂には世を厭ひ又世に厭はるゝに至つたので、決してその

萬卷の書はプロニーが立ち讀みの一ページの功能どころか、その萬分一にも及ばなかつたらしい。素より人に能不能あり、盡くこんな譯にはいかぬが、心掛のよしあしでは同じ讀書でも大きな相違の起る者である。斯る學問上の一大事業を僅かにアダムスミスの一頁の瞥見から思付てあんな工合にやつたとは實に面白い話である。素より人盡く、プロニーたることを期する譯には行かぬが、學生たるものは眞理の研究を務め、知識の活用に心掛けて自己の發達を計り、次第く社會の幸福を進むるの任に當らなければならぬから、常に精神を活潑鋭敏にして、自然の事物に注意し、社會の事相に配心し、成るべく實地實物に當りて研究し立案して行かなければならぬとは勿論であるが。又書物を讀むも甚だ大切な事で、要は只必ずしも多讀を要せぬ勉めて之を參考し活用して、彼の虫干流を避け、プロニー流に讀むことが肝要である、今の日本の如く社會に書物以外に教育機關の具備せぬ世の中では、讀書は中々輕んずる譯には行かぬ、しかし最初の話の

如く、象は如何なる動物なるかを知りたくば、字引に依るよりも動物園に行き、動物園に行くよりも印度に行くと云ふ方針に成つて來なければ、學問教育が國民を實行的ならしむるの効はない。

一〇 俗識と學識

俗識と學識、俗識と云ふのは少し妙であるが、學問をせずには知れることを云ふので之には常識といふ語が丁度宜いかも知れぬ。しかし世人はコンモンセンスを常識と譯して居る。常識は已にコンモンセンスに取られてしまつたから、已むを得ず之を俗識とする。そこで俗識と學識との關係を述べやうと思ふ。例へば小石を水の中に入れると下に沈む、木の葉を入れると浮く、是は誰にも分つて居る俗識である。小石は沈み木葉は浮くと云ふとは是は見た所では反對の作用を爲すようだが、其の反對の作用を爲さしむる所の原力は一つである。何である。かと云ふと重力といふもの、即ち

比重の作用である。小石は水よりも重くして水より下の地位を取り、木葉は水よりも軽いから上の地位を取る。つまり重力の作用であると云ふことを知つたならば、是は即ち學識と謂はなければならぬ。又茲に蠟燭に火がついて居る、それを水の中に投げ込むと、是は消えるに極つて居る、誰しも知つた事で、是は俗識である。しかし燐を水中に入れると燃え出す此反對の顯象が何故に起るか、之を知るは學識に依らざるを得ぬ。

是は唯有形的、理化學上の事であるが、今一步進んで此の人間社會の事になると、政治にせよ、經濟にせよ、均しく此の俗識と學識との別がある。海岸には魚は多いものである、大森に行つて新しい魚を食つたならば、是は大森の海で取れた魚、流石は海岸、魚が新鮮で宜いと云つて喜んで食つて居る。併しながら其の實は日本橋から買つて來た魚である。又向ふの千葉の海岸に行つて魚を食はうと思ふと、どうも良い魚が食へない、殊に大漁の時は尙更食へぬ。漁獵の少い日は却つて魚があると云ふやうな事があ

る。是は何であるかと云ふと、元と此の田舎の地方の爲に魚を捕るのではない、之を東京日本橋に持つて行かうと云ふが目的であるから、東京に出すに足りぬと云ふやうな不漁な時は、却て其の土地で魚を賣つてしまふと云ふとが起る。普通に考へるよりも、實際非常に違つた作用を爲して居る場合がある。會て或る蜜柑好きの人が蜜柑の名所たる紀州に行つて大に失望して歸つて來た。何故なれば上等の品は青い時に取つて都會に出してしまふからである。嘗に蜜柑と魚類のみでない、百貨集散の作用は皆此の如き者である。總て物は需用のある處に集まると云ふ經濟上の道理を知つて居れば、始めて之を知つて失望する等もない。歌人は坐らにして名所を知るとは此事である。そこで此の俗識と學識との差異は、一は直覺と經驗とより生じ、一は概括と分析との二作用から起るので、即ち事物を概括し、又分解して生ずるのが即ち學識と云ふ者である。現に剃刀を研ぐとよく切れると云ふ事は誰も知つて居る。それから坂道を削つて低く長くするとき

は登り易くなると云ふ事も人はよく知つて居る。此の二つは全く違つた互に縁の無い事の様に俗識では思つて居るが、學識の方から見ると全く同じ事をして居る、剃刀を研ぐも坂を削るも均しく物理學上楔子を鋭くするの道理に基いて居る。即ち學問の役目は事物を分析して其の組織成分を明かにし、其の共通の點を概括總合して其の原則を知る。論理學から云へば歸納法に依て得たる定義を更に續釋して事物を説明し、以て格物致知の作用をなすといふ者である。そこで剃刀と坂道とのみならず、其の他千種萬様の事實にして、此の一律の内に入るものがあらう。所謂天則の下に事物を統一するのが科學の科學たる所以である。是が又哲學となると一層廣く概括して總て事物は最少抵抗の方に向ふと云ふ上乘の廣理に歸せしむるであらう、即ち最初に云へる小石は下へ沈んで木葉は上へ浮ぶのも、研ぎたての剃刀がよく切れ削つた坂の登り易いのも、魚類蜜柑の都會に集るのも、皆最少抵抗の方面に嚮ふと云ふ、一の總則に歸してしまふのが哲學の本領

である。

人間の世に處するのには俗識ばかりでは可かぬ。どうしても學識が無ければならぬと云ふことは明白である、しかし此の學識をまる出しにしては俗識と調和の取れぬ場合が起て來る。此の調和を圖るのは何であるかと云ふと、これは所謂常識の力に依るの外はない。古來學者と俗人の間に聯絡が付かず、貴重な學問が社會の用を爲すことの意外に少ないのは雙方に常識の缺乏せる爲めである。

一一 文勇武勇の辨

勇氣、今の世の中に人間勇氣を有つて居らなければならぬといふことは言ふまでも無い。併ながら此勇といふことは、多く武勇の意味に解せられて居る。武勇なるものは無論必要である、個人としては今の文明社會に於て

は法律の保護を受けて居りますから、さう無暗に武勇の必要もないが、併し法律の保護ばかりでは可かぬ。今日の世の中に於て自分の一身を全うしやうといふだけでも、随分勇氣は無ければならぬ。勇氣があればこそ其の勇氣を用ゐずして済むて居る。全く勇氣の無い人であつたならば殆んど生存は出来ないと云ふ位の有様である。況んや是れが一國として生存しやうといふのには、即ち其の國民なる者は勇氣が無ければならぬ。差當り此の勇氣の中で武勇が無ければいかぬ。今の世界は殆んど弱肉強食で互に吞噬をしやうといふ世の中であるから、國民に勇が無かつたならば國の獨立を維持することは出来ぬ。明治卅七八年の日露戦争、是れの如きは若し我國民に武勇が無かつたならば、益々露國は東邦に向つて吞噬を逞しくして來て、到底此の國の獨立は維持することが出来ないといふことに迫つた。故に已むを得ず我が四千萬の同胞が謂ゆる此の武勇を揮つて之に當つた。是れが即ち日露戦争である、而して其の戦争たるや大に戦捷の名譽を博して、

東洋の平和を保つ所の基礎が出来たといふのも、畢竟此國民の武勇の精神に基くことが多いのである。尙此外に文勇といふものが無ければならぬ。文勇といふは少しく新しい語であるが、文武といふことが始終相對照して居るから予は一方のミリタリコレヂを武勇と名けると同時に、他の一方シビルコレヂを文勇と名けたのであるが、此の文勇といふものは何時でも命を捨て、死にさへすれば宜いといふ譯には行かぬ。或點からは成るだけ死なぬ、如何なる迫害如何なる困難を凌いで、生命を成るべく長く保つて己れの目的を達しやうといふ所の、極平つたい言葉で言へば辛抱強いと云ふ勇氣が無くてはならぬ。即ち如何なることに於て此勇氣が主もに現はれるかと云ふに、先づ政治家としても持つて居なければならぬ。四方八方から來る所の攻撃の矢を防いで、困難の中に己れの政治上の主義を貫かうといふ、謂ゆる政治上の勇氣、是れが即ち文勇である。又學問上にも此文勇が無くてはいかぬ、無論學問上に於て自己の學說を維持し自己の發

見したる眞理を主張する。世上の頑迷不靈な譯の分らない者は新しい説に敵對をする。是れは歴史上にも幾らも例のあること、今日から見れば争ふべからざる所の眞理でも、或時代には全く之を邪説となし異端となして、迫害せられた例は甚だ多い。斯る場合に當りて、之を切り離けて、終に己れの眞理を通さうといふが爲めには、非常なる勇氣が無くてはいかぬ。即ち是れが文勇である。己れは是れを以て世の中の人を救ひ、之を以て國の文明を開くのであるといふ決心を持つて其の主義を貫く爲めには如何なる敵が來ても怖く無い、誹謗も來れ迫害も來れ、侮辱も來れ生涯如何なる苦みをしやうとも、それに頓着せず自分の信ずる所を貫くといふ勇氣が即ち文勇である。政治上にも學問上にも、社會の制度の上にも宗教の上にも、皆此文勇が無ければ今日までの開明進歩は出来なかつた、今後といへども同じことである。而して文勇の最も多く發揚せられたる所の方面は何んてあるかと云ふと予は宗教であると思ふ。此宗教に於ては最も多く此文勇を

發揮したる所の例は外國にも随分多いが。我日本に於ても凡そ一宗派を開かれたる所の祖師——一宗の開祖となられたる所の大人物、此等偉大なる人物の歴史を讀んだならば、悉く此文勇發揮の適例ならざるは無いので、例へば弘法大師にせよ、又親鸞上人にせよ、皆自己の所信を以て衆生を濟度しやうといふ決心の爲めには、自己の身命を擲つ位のことは何んて無い。非常なる勇氣、武勇位はもう最初に現はれて居るが此文勇を發揮したことは非常なもので、就中本日此日宗大學に降誕會を開かれた本宗祖日蓮聖人といふ御方は最も此文勇に於て偉大なる所の大人物。それで予は別に宗教のことは不案内殊に法華經はどんなものであるか、日蓮宗はどういふ教義のものかよくは知らぬが、幼少の時などはよく日蓮宗の御寺へ遊びに往くと、高祖の歴史を書いた額や巻繪ものゝやうな物、縁起のやうな物が往々目に觸れる、是れが自然と感化を興へる。随分法華經弘布の爲めには非常なる迫害に遇ふた。時の執權北條氏——政府の爲めに非常なる迫害に

遇ひ、他宗門の爲めに非常なる苦難を受け、また世間から激烈な攻撃を受けて、もう命を捨てる位のことは何でも無い。其れ以上此文勇を振はれたことに至つては、恐らくは之に超ゆる人は無い。宗教上自己の信心の爲に自己の教義の爲に、斯の如く艱難辛苦をせられ、斯の如く深刻なる迫害に遇ふても、寸毫も自分の主張を枉げぬ。どうしても是れを以て己れは此人間を救ふのである、之を以て一切衆生を濟度するのである、即ち己れの信ずる所のものは唯一の眞理であつて、他の宗教は悉く皆間違つて居る、念佛無間律國賊禪天魔云々とまで唱へられたのである。他の宗派は佛教の眞髓を得たる者では無い、我が教義こそ、最も釋迦の精神を得たる者であるといふ、之れが爲めには萬難千苦を排して猛進驀進したる、日蓮聖人の此氣根といふものは非常なものである。之れを名けて即ち文勇と言はなければならぬ。そこで是れは宗教界、學問界、政治界の偉人大人に於てのみ必要と云ふのでなく、人物の大小に拘らず、宗教で言へば一般の信徒、學問

で言へば各自の學生、政治上で言つても各人民が多少此文勇を具へて居らなかつたならば、逆ても國は立往くものではない。又進歩することは出来ないのである。今此日本人は武勇に於ては天下に雙び無きものであるといふことは自らも言ひ、又世界の人も許して居るやうである。併ながら此文勇といふ點に至つては、國民は果して世界の人の上に位することが出来るか、又歐米諸國の人民に比して日本が文勇の點に於て、勝る事武勇の如くなるか。成程日蓮とか、親鸞とかいふ人物は殆ど歴史に於て無比として誇ることが出来る。併ながら此文勇の點に於て、是等の大人物が有つて居られた所の、その幾部分を有つて居る所の各人民の分け前に至つて、日本は今日の歐米諸國に比して誇るだけのものがあるや否といふことは、疑問と言はなければならぬ。日本人は敵に向つては強い人民である、日本人は戦争に方つては勇猛なる國民であるといふとは随分言へる、併ながら文勇の點に至ると、どうも予はさう誇ることは出来まいと思はれる、即ち日本人

が先づ今日の各人銘々營まなければならぬ實業——商賣、工業、農業、に於て、又其他學問上の點に於て、或は政治上の國民各自の權利に於て、日本人は歐米各國人より勇氣に富むて居るかと思ふと、どうも予は直に然りと答ふる事は出來ぬと思ふ。随分歐米各國の人が殖民をする、己れの國に於て得る所の生計には満足せずして不毛未開の地に這入り、草萊を拓いて自己の天地を作る。阿弗利加の真中でも印度の山中でも、アングロサクソン人種などはドシ／＼進入して、その領土が出来る。謂ゆる日輪没する所無しといふ位までも自己の領分が擴つて來たといふのは、武勇も入るが文勇が無ければ出來ないことである。學問上發明工夫の結果たる蒸氣電氣を利用して驚天動地の事をする。政治上に於ては幾多の革命を経て段々と民權を伸ばし、國利民福を進めて來たのも皆此文勇の結果である。そこで此國の發展の上から考へた所が、足らぬものを足すといふことは、既に餘れるものを尙ほ其の上に足すよりも急務ではないかと思はれる。即ち吾々の

武勇は勉めて之を保存しなければならぬが、唯だ戦さだけに強くなつて、他の方面が御留守になつても宜いかと云ふに、さういふ譯には行かぬ。武にも強ければ文にも強い敵に向つて命を捨てることを何とも思はぬと同時に、内に向つては平素に平和の仕事をして往くためには、成るだけ命を捨てない方の勇氣が無ければならぬ。己れはどんな事があつても死なぬ、どうも此大切の命は、さういふ粗末の事や、軽い事に捨てる命では無い、益々此身心を發達せしめて人生の使命を達せなければならぬ、さうして此國家を富強開明にして行くのが吾々の任務であると、斯ういふ決心でなければならぬ。戦に臨んで死を輕んずると同時に、平和の時にはどうしても死なぬ、況んや何も謂れなく華嚴の瀧から飛降りる如きは愚の骨頂である。人を殺して己れも自害するなどに至つては、殆んど沙汰の限りの大馬鹿であるが、成るべく此の身心を發達せしめ忍耐を重ね、自分一代でいかぬことは子孫の末に至つても自己の目的を達せしめやうといふ精神が國民にあ

つてこそ、社會は段々進むのである。その精神がどうも日本人には少いやうである、どうしても之を人の頭の中に注ぎ込むことが非常に必要であらうと思ふ、即ち文勇を養ふが肝要である。

一二 少年の自尊

自尊と云ふことを述べたいが、之を自と云ふ字と尊といふ字と合はして讀むと餘程妙な感覺が起る。又この自尊といふとを自尊誇大といふ様な風にも使つた習慣があるから誤解の起るのも無理はない。併し是れが西洋諸國では當り前のとて、此獨立自尊の精神は彼等の頭の中に浸込んで居つて、それが發して今日の歐羅巴の文明となつて居る。チャールズ デッケンスの記行に『ボストンの美術館に入ると』自尊の人は此美術の殿堂に於て脱帽して『靜肅なり』と書いてあつたとある。苟も自尊の人なら命令はせずとも、此美術館へ來て不遜な舉動をしまいと云ふ意味合である。自分を尊び自分を

金玉の如く思ふ人ならば、他人の迷惑になるやうな粗暴な舉動を爲す譯がない。そこで圖書館或は美術館の如き、人が精神を込めて、折角樂まう、折角學ばうとするのを妨げるやうな野鄙な粗暴な振舞はどうしても有られない筈である。こんな所から自尊の意味を味ふて見て、其外の事にも推し及ぼすとよく分る。この意味に於て自尊の心を持つならば人が叱つたから叱からぬからと云ふ譯ではなく、おのれが己れに對してどうしても賤しいことは出来ない」と云ふのでなければ行かぬ、即ち奉公人根性を脱すると云ふとである。

それから又自尊と云ふことは輕佻浮華表面を飾るのとは正反對で、自ら重んじて實力を養ひ、自分の力のあらん限りやらなければならぬが、有りもしない力があるやうに見せて、ズルイとをして、試験點を取らうと云ふやうなどは、最も自尊の主義に外れて居る。何となれば自分を尊ぶ以上は自分で自分を欺くことは出来ないからである。人が自分より好くなれば其人

に追付かう、其人を凌駕しやうと云ふので、奮發勉強するのは男らしく、競争は誠に宜しいが、人の長所を羨み嫉みて人の勉強を妨げ、共に懈怠の方へ導かうと云ふやうなことは、皆獨立自尊の趣意に反對である。それから表面を飾ると謂ふ中にも、着物や居室を清潔にして、垢の付かぬやうな皺のよらぬやうに能く秩序を正し、靴は毎朝磨いて泥の附かぬやうなどは勉めてやらなければならぬ。併し直段の高い綺麗な衣服などを着て、それで威張るやうな少年があれば、是れは所謂輕佻浮華邊幅を飾る小人で、誠に輕蔑すべき人である。例へば十圓で茲に洋服が出来る、それを十三圓出すと云ふと少しビカ付いたのが出来るよと云ふて此方にする人がある、唯少しく人より綺麗に見えるのが嬉しくって親の金を三圓餘計に費すと云ふ迄の事で、是は非常に馬鹿な奴、三圓ぐらゐ餘計出したッてえらくも何ともない、誰も驚きはしないナニ此三圓で相場の附くやうな人間ならば非常に粗末な人間である、則ち其人は三圓だけの人間、三圓野郎と云ふのである。丁

度面白い話がある、予が會てユートビヤと云ふ本を讀んだ事がある、此は餘程古い千五百年代に英國のトーマス モトルが自分の理想で一つの黄金世界を想像し、彼の古賢プラトンのレパブリックに倣つて書いたと云ふのであるが、その無何有郷では總て聖人の理想的政事であるから第一間違つたとは、世の中の人々が黄金を尊ぶとてある、金屬の中では、鐵こそ尊い有用なものである、金銀は唯ビカ／＼光るばかりで能のないものである、所が世の中の人々が馬鹿で、其のビカつく所に眩惑されて無闇に尊重して居る。唯々尊ぶだけなればまだ宜いが、それを持つて居らぬ者が持つて居る者を羨しがつて、其前にお辭儀をする、お辭儀をしても其人が分けても貸しても呉れぬ。是ほど馬鹿などはない、唯馬鹿だけなら宜いが、之が爲に社會に生ずる弊害は大なるものであるから、此黄金白銀は成たけ之を輕蔑するやうにしなければ成らぬ。今一層馬鹿なことはダイヤモンド、ルビの寶石を尊んで、それが爲にいろ／＼苦勞をして、自分の身體に其のかけつば

ちを喰附けて威張つて見やう、と云ふやうなことで、それを着けた人が威張り、着けない人が弱つて居ると云ふのは如何にも馬鹿々々しい、それが爲に國の内に騒動を起し、難澁をすることは愚かな話してあるから、是非排斥しなければ成らぬと云ふのでユートピアの聖人國では、外の國と一風變つて先づ金銀を下等なことに使用する、しゆびんを拵へる、黄金で塗るが宜からう、小便所を拵へる、銀で塗るが宜からう、何でも汚い所を金銀で以て作り、それからダイヤモンド、ルビーとか、云ふ寶石のピカ／＼するものは皆子供の飾り、赤ん坊には一番餘計附けてやる、苟も丁年以上に達したものはあんな馬鹿なものには附けぬことにして、一切子供の飾りと云ふことに極めてしまつた、所が是がなか／＼巧く往つた、然るに程なく其隣國から使節が来る、其使節はユートピア國は何でも質素を尊んで一向綺麗なことをやらんから、綺麗にして往つて一つ驚かしてやらうと云ふので多くの同勢を連れて大使は金銀、金剛石などを一ぱい附けてピカ／＼光

らして、それから其次其次と段々位の低い程飾りが減つて、下等の小者になると何も飾が無いと云ふやうな譯で行列を立ててやつて来た、ユートピア國の老若男女皆大道へ出て、待つて居る所が整々堂々としてやつて来た、さうするとマア何でも立派な大官がやつて来ると、ユートピアの方ではさう云ふ立派な服装をして居る者は下等な者となつて居るから、肝心の大使のピカピカを見て、何でもあれは先觸れが何かだらうと云つて一向かまはぬ、それから段々あとの程飾りが淋しくなり、下等の何も飾つて居らぬ奴が来るとあれが大使に違ひないあれは顔附も何となしに尤もらしいと其人を大變尊んで、大使閣下の方がとう／＼御供か何かに思はれて仕舞つたと云ふ話しが書いてある。少年諸君も此質素主義を以て自尊の心を養ふがよからう。

それから又少年は成たけ父母兄弟の關係を忘れないやうにしたい、家庭を忘れると云ふ事は大に悪い。成たけ寄宿もするが宜い旅行もするが宜いが、

其間に親子兄弟の親愛を損はない様に兄弟の情愛を冷くせぬやうに否、成
たけ暖めるやうにやらなければいかぬ、先づ休の時ならば近くの者は父母
を訪問し兄弟とも逢つて遊ぶ、遠方ならば手紙をやらなければ可かぬ、手
紙は毎日やてつてもよい毎日やらんにしても必ず一週間に一度はやるとか、
近い所でも成丈やるが遠國なら尙更やるのが大切なことである、是も日本
人の瑕瑾として、手紙を書くことを非常に憶切に考へてどうも書かぬ、歐
羅巴の人は感心な事には何處へ往つても手紙を書く、尤も其設備もよく整
つて居る、宿屋の内には必ず書狀認め所があつて封筒と用紙が置かれ、誰
でも書くやうに便利が整つて居る。そこで巧いことを書いてやらうとかえ
らく思はせてやらうと云ふやうな謀叛氣を出す手紙がむづかしくなつて
書けなくなる、書く事がなければ何でもよい狗が三疋子を生だとか、昨日
雨がふつて今日は上つたと云ふことでも何でも宜い、度々やると云ことが
誠に大切なことである。その外朋友にも親戚にも手紙をやるのが非常に大

切である、此手紙の事に付ても自尊主義から云ふと、從來の詞を直す必要
があると思ふ。成程手紙だから成だけ親切に鄭寧に書かなければ成らぬ。
向ふの感情を害するやうな、向ふを怒らせるやうな手紙をやるならやらん
方が宜い、しかし又無闇に古來の日本や支那の習慣として、自分の事を卑
下して仕舞はないで、成たけ威嚴を損せぬ趣意で手紙も書かなければなら
ぬ。日本古來の手紙の文體を見ると、マア存じ奉り候とか、或は參らせ候
とか云ふやうなことは何うでも宜いとして、随分いやな事がある、自分の
息子を豚兒、妻を荆妻、阿父さんを愚父、それから自分のことを迂生とか
野生とか、鈍生とかあらん限りの罵詈譏を自分の方に加へた上に、及ば
ずながら犬馬の勞を盡し奉つる杯書くのは、謙遜が過ぎて不見識極まる。
畢竟習慣になつて何とも思はぬが、若し流義の異つた國の人から見たらど
うであらう。現に或る書生が西洋へ行つて其親父が禮狀を先生の方へよこ
した、其うちに豚兒、荆妻などがこて／＼と書いて在る、其先生が是非直

譯して呉れと云ふので無據やつた所が非常に驚いた、何のことはない自分の家内を豚だの犬だの馬鹿だの色々な者が寄つて居る様に書いて居る。是程まで何も卑下して書くには及ばぬ、私共とか吾父母とか何とか書けば宜い、是は矢張り支那の文章から移つて來てこんな習慣をなして、殊更にむつかしい豚兒とか荆妻とか書くと學者らしく見へるとか何とか云ふのは非常に馬鹿な事だから、之を廢すと云ふのも小さな事だけれども自尊の上で大切な事と思ふ。それから人に物をやる時に誠に粗末なものですけれどもと云ふのは馬鹿な話、人に物をやるのは良い物ならばこそやる、悪い物ならやらぬが宜い、自分が一生懸命で町へ往つて態々取つて置いて貰ひ合せましたとか到來ものですなど、云つて、成たけ自分の品物へケチを付けて、贈ると云ふは大變馬鹿な話だから、諸君は人に物をやると云ふやうなことは無いでせうが、何しろ自分を無闇に輕蔑する、自分を奴隸の如く降參武士の如き地位に置いて他を君主の如く見ると云ふことは却て非禮なことで

ある獨立心に富める人は之を諂諛として輕蔑するとも決して喜びはせぬ。其他落書など、云ふことも、自尊の趣意から謂ふと言ふ迄もなく自分の居る教場自分の居る部屋、或は寄宿舎の廊下などに向つて色々な「馬鹿野郎」とか何とか書く、自分の身が貴重であるならば、又自分の身を取巻いて居る所のテーブルでも壁でも、苟も自分の身を容れる處、金玉の身を容れる處は金玉でなければならぬのに、之に向つて色々な粗末な事を書いて、さうしてさう云ふ器の中に自分の身を容れると云ふことは、詰り自分の身を卑しめる働きて、自分の顔に向つて「あれは馬鹿で候」と書くのと同じことである。それ等の點を言ふと多くあるが、此獨立自尊の主義即ち唯叱られるが怖いと言のではなく、自尊獨立の精神を以て自分の身を治めて往くことを予は少年諸君に望む。

一三 腦税を減ぜよ

近來我が國位の高まると共に、租税が著しく増加して國民一同大いに其負擔に苦んで居る。併し是れは一方に民力の發展を計り又課税法さへ宜しきを得るに至らば、必ずしも甚だしき憂をなすにも及ばぬと思ふ。之に應ずる丈けまだ、富の發達する餘地があると見て宜いとしたところで、他の一方に於いて第二の國民たる少年兒童の腦髓に係る税額の増加することは大なるものである。この税は少年の軟弱な腦髓に向つて壓迫を加へるのであるから、その害をなすの甚だしいことは言ふ迄もない。今日の小學校、中學校、中々豪い税を頭に掛けて居る。その税目は色々あるが、その最も重きものは、即ち文字税である。漢字と假名と交せて使はなねばならぬと云ふことの爲に非常な苦みをして居る。その上に英語を覺えるとか、獨佛の語を覺えると云ふことも、高等に進むに隨て殖へて來る。そこで英人が佛語、獨逸人が英語を學ぶと云ふような事は左程むつかしくもないが、日本人が漢書を読む丈でもこれよりは遙かにむつかしいことである。夫等の

點から少年の腦税が非常に重くなつて居る。先づ第一漢字を覺えねばならぬ、又假名も覺えねばならぬ。この假名には片假名あり、平假名あり、又萬葉假名もある、その上其綴り方にも種々の方式があり、又漢字の音訓送り假名など容易なことでない。そこで新聞や書物にしても、その本字を書いて其傍へ振假名をする、恰かも重譯の體である。人種の入混つた國杯には數多の對照語を書いて居る處があるのは随分不便な事と思はれる。例へば停車場の札にアントエルペンと、アンベールと云ふやうに二ツ書いてある。しかるに日本の如きは水入らずの同人種の國でありながら、品川と書いて又「しながは」と書いてある。尙もかしいのは西洋の言葉を譯して漢字に書き直して、「ランプ」を洋燈と書く、又それへ「ランプ」と假名を振る實に御苦勞千萬な話である。初から假名でランプと書いて置けば宜さうなものが、文字があるためにこんな餘計な事を書く、子供にはそれが分らぬから西洋料理の洋の字はランプのランの字と同じだと言ふやうな笑ひ話が起る。然

るに今日ではランプを洋燈と書て、假名を振ることの出来るやうな人を、教育ある人と云ふことに成つて居る。之れが出来るが爲に實質的に於てその人の脳髓に何があるかと云ふに何にも無い、初からランプと極まつて居る。併しそれまでの苦しみは非常なものである。言ふ迄もなく漢字なるものは、形象文字と思想文字の混合で假名はシレィブルを代表し、羅馬字は原音を代表する、この三ツを對照して、先づ之を物理的に譬へると形象文字は一の物體と見做し、假名は分子と見做し、羅馬字は原子と見做すことが出来る。物體は之を分解して分子となり、分子は之を分解して原子となる。即ち原子が抱合して分子が出来、分子が凝集して物體となる。例へば形象文字即ち漢字は一ツの握飯と云ふやうな物で、この握飯はもと米と水とから出来て居る。この水は酸素と水素から出来たものである。即ちその水の分子(モレキュル)は酸素と水素の抱合物であるから、之を分つと水素と酸素と云ふ原子に分ることが出来るのである。今若し此の宇宙間の萬物が、

物體のまゝで分解することが出来なかつたならばどうであるか。又分子のまゝで原子に分拆することが出来なかつたならばどうであるか。非常に不便どころか宇宙の經濟は全く止つて仕舞うであらう。畢竟要らなくなつたものは毀れて復た外の物を造るから、この宇宙間の萬物は減ずる事なく又増す事なくして、新陳代謝の作用が行はれ、所謂物質不滅の天則が一貫する。この天則の働きに依て僅かに七十七種の原子が常に分合會離して、新陳代謝の作用が行はれて居るのである。之を見れば從來日本に行はれて居る漢字よりも假名よりも、羅馬字の方が良いと云ふとは争はれぬ理屈である。即ち僅かに二十五六の文字が分合會離して千言萬語をなす事は、恰かも彼の原子の森羅萬象を形作るが如きものと云て宜いのである。併しながら歐羅巴若くは印度等に於て音譜文字を使つたと云ふことは、支那、朝鮮、日本等に於て形象文字を使つたと云ふことは、素より偶然の出来事に違ひない。決して國民が剛巧であつたからアルファベットが出来た、馬鹿であ

つたから形象文字を使ひだしたと云ふ譯ではなく、最初は全く偶然の出来事に違ひない。只交通の結果で、支那と交通のある國民は形象文字を用ひることになり、又印度の關係の爲に歐羅巴はアルファベットになつた。是れ決して國民の性質又は智愚の關係でなく眞の偶然であるが、併しながら今日から考へて見ると、どうしても形象文字では可かぬ。又假名にしても五十歩百歩矢張り可かぬ。結局音譜文字に成らなければならぬと云ふことは、理に於ても實に於ても争ふことは出来ぬ。如何なる人と雖もこの利害の點に於ては議論を挟むことは出来まい、固より形象文字の利益なる點もあり又假名の利益なる點もあるが、大體の原則として如何なる文字が宜いかと言へば、結局原音譜式の文字に歸着する。今日漢字を廢すると先祖代々の石塔が讀めぬとか、從來の記録が讀めぬとか云ふ事は無論であるが、然らば此文字が今生れた子供に讀めるかと言へば矢張讀めはせぬ、日本に生れたならば生れながら漢字が讀めると云ふものなれば夫れは一理あるが、

其實は數年乃至數十年の間艱難辛苦して、即ち非常の腦税を掛けて漸く文字が讀めることに成る。折角澤山の文字が讀めるやうに成つたと思へば、モウ老境に入て居ると云ふ譯であれば決して有難くない。そんなことを理由として之を辯護しやうと云ふても之を首肯する譯には行かぬ。或人は又徳育上から言つても、支那の文字を廢する譯に行かぬと云ふ。例へば仁義禮智信の仁の字を見れば直にその字を見て有難いと云ふ感じが起る。義の字を見れば直ぐに貴いと云ふ感じが起る。是が即ち支那文字の徳である。之を今日廢せやうと云ふことは如何にも亂暴のことであると云ふ人もある。成程十年も二十年も漢書を讀んだものならば、仁の字に三枚の註釋を附け、義の字に二枚半の註釋を附けて、何十年の間之を讀ませられ、如何にも結構なものであると腦裡に染み込んで居る人には、文字を一見して其感じが起るが赤ん坊にそれが分るものでは無い。素より仁義の尊い事は云ふ迄もないが、文字は只の假りの着物である。文字に附着する聯想と云ふものは、

初學の兒童に對しては何の關係もない。是れ迄漢字に苦勞し抜いた老人の心を以つて、小兒の心を付度する譯には行かぬ。此節では、人道、權利、義務、自由杯云ふ語も非常に神聖なやうであるが、之れは只西洋の譯語に過ぎぬ。それでも近來は却て仁義等の文字よりも勢力が強いやうである。又西洋人がリバチー、ライト、ジャスチス、ヒューマニチー杯云ふ字を見れば一種の感念が起る。日本人でも其文字を見慣れた者には同様の感じが起ると言ふのは、即ち羅馬字でも慣れ次第で同様に貴い感念が起る證據である。それは文字から來たのでなく、意味其ものから來たものである。人と云ふ字を見て人間と云ふ心持ちがする、魚と云ふ字を見て忽ち魚と云ふ心持ちがする、それを羅馬字で書くとその感念が起らぬと言ふ人があるが、それは長い間教へ込まれた結果其觀念が起るので、假令漢字でも子供が始めて見た時には、決してそんな感念は起らぬ。その點に於ては文字の種類に依て少しも違はぬ、吾々の主眼とする所は、詰り少年の教育、第二の國

民を如何なる文字に依りて教育するのが將來の國運發展の爲め、文明進歩の爲に宜いかと云ふ點から此問題を解決するのである。是迄數十年の間漢字を學んだ吾々の心持ちを有つて、白紙のやうな頭腦の少年のことを決定するのは、畢竟自己の心を以て他を付度するものである。兎角人間の弱點はフォートモルホシス即ち自己本位の考と云ふことはどうしても免れぬもので、大人の心を以つて少年の心を付度し、男子の心を以つて女子の事を論ずるから正鵠を誤るのである。形象文字も社會の簡單なる而かも進歩と云ふ事のない時代には、大なる不便もなかつたが、今日の如く新事物新思想が日々夜々に發生増加して來る時代に於ては到底此漢字に依る譯には行か無くなる。今日の新聞の如き毎日々々新しい熟字を作り出して殆と底止するところを知らぬと云ふやうな有様で、到底之に堪えて行くことは出來ぬ、又一説には支那、朝鮮は同文の國であると云ふことを云ふ。之は御世辭にはちよつと宜い言葉かも知れが、其實漢字なるものは多數の支那人には讀

めはせぬ、古文は素よりのこと時文の讀めると云ふ者でも、割合に於ては至つて少なく、殆ど文字を知らぬ人民が支那の大多數を占めて居る。又支那人に對して日本人が日本流に漢字を並べて見せたところが少しも通ぜぬ。日本流の漢文で書いた所がこれは古文であるから支那人にはめつたに分らぬ。又日本の俗文を書いたならば猶ほ分らぬ。或る人が支那の山東省に行いて孔子之廟見度候、と書いたところが、見度候者吾未知其名也と答へたさうである。又支那人が日本に来て切手所と云ふ看板があつたので、手を切斷する所だと思ひ賄所を賄賂の役所と思ふたさうである。總て此の如き語法の相違から却て誤謬を起す事が多い。又朝鮮は日本人の如く漢字を借用したのであるが、此朝鮮にも諺文ハルマと稱して音譜文字がある、サンスクリット字か又は羅馬字から採つたと云ふ話であるが、漢字の片つ方を取つた漢字をくづして拵へた日本の假名よりは形に於ても巧みに出來て居つて、無論漢字よりも假名よりも原音譜式だから宜いのである。支那は文字の國

と云ふが文字は士大夫以上の事で、彼國では讀書人と云ふ語は上流社會と云ふ意味に使はれて居る。朝鮮も無論其通りである。そこで漢字を以て普通教育を行ふ事は木に縁て魚を求むるに均しい、支那も近來教育の普及に着手して見た所が、形象文字の爲に妨げられて逆も普及は六ヶしいと云ふ事實が段々證明されて來た。何とか方法を講ぜねばならぬと云ふ話である。而して支那人の大多數は此文字を知らぬから、支那の方は日本より却て形象文字を棄てるとは容易い、又朝鮮も無論その通りである、故に或論者の云ふ如く支那、朝鮮の交際上にとせば、氣の毒ながら此點からの漢字保存論は其理由を失つたと云はねばならぬ。現に漢字を以て彼我の交際に便するのは、纔かに政府間及士大夫學者間の交際位であつて、一般の通商其他の點に於て一般の國民と國民とが接觸する上に於て漢字は何等の效を爲さぬのである。故に予はさう云ふ議論には全く耳を傾けぬ。是迄も往々中學校の科程から漢學を除かうする議論が大分あるが、一派の人は之れに

反對して清韓兩國に交際をなすには、漢文が唯一の利器であると言ふ、此等の人は大に支那朝鮮の事情に通じて居る様な顔をして居るが、事實は全く其の反對で、只漢字が支那から渡つた文字だから本元の支那の人は皆字が讀めると思つて居るか、全く之は清韓の真相を知らぬ議論である。この點からの漢字漢文の保存論は一顧の價もない。外に又羅馬字の利益と云ふ點は、タイプライターの使用リノタイプの使用か出来る事である。此二大發明を利用することの出来ぬのは全く漢字を用ゐて居る爲めである。是非此二大利器を利用し得るやうに文字が成て來なければならぬ。尙此の外に書記術、印刷術に於て文明國は追々と新發明新工夫を起して來るに相違ない、然るに依然として我國のみが文字は一字づゝ念を入れて書き、又印刷には一字づゝ活字を拾つて居るやうなことは、とても此の激しい競争場裡に歐米諸國と驅馳する譯には行かぬ。

又句切法即ちバンクチユエーションの事に付て一言するの必要がある。コ

ンマ。セミコロン、コロン、ピリオッド抔云ふやうな符號を使ふ事も幾分か日本文にも這入つて來たが、まだ／＼其の使ひ方が不都合千萬なものである之れは漢書にも句讀、段落抔云ふものもあるが、實は無點白文が本式となつて居る。西洋の符號も漸次に正確な者に成て來たので大昔から之が整つてあつた譯でもない。紀元前百年頃アレキサンドリヤのアリストファネスと云ふ學者が考へ出したがそれは餘り實地に行はれなかつた、十六世紀の頃に至つてベニスの商人で而かも學者なるメンチユスと云ふ人の工夫したものが行はれて居るのだと云ふ説もある。成程是等一個人が考へたものもあらうが、人文の進歩するに従て矢張り自然の必要上から句切の方が起つて次第に綿密になる。之れがなくては文章の意味に間違ひが起る、その間違を防ぐが爲めにこの句切法が行はれてこなくてはならぬ、漢書の句讀段落の如きは實に粗雑な者、只讀切の方から出來たので、文章の關係を明にすると云ふ效能は少ないものと思はれる。しかし西洋でも古代は句切

が無かつたどころではなく、一語々々の分ちと云ふとさへも無かつた。その證據には各國の博物館、圖書館に往つて古代の書物を見ると、その證據を澤山見出すことが出来る。例へばウィックリフの翻譯したバイブル或はチヨリサーのキャンターベリ物語、ダシテの神曲杯の原本がある。是等を見るのとべつ幕なしに續けて書く事、恰も日本の假名の續け書きと同様で一語々々の切れ目さへない。況んや句切の各種の符號をや。然るに次第々々の進歩に依て、それが段々と語と語との間が分れるやうになつて來た、その次にはピリオッドを切るやうに成つた、次にコンマを切るやうに成つた、次にはコロ、セミコロが出来ると云ふやうに成つて遂に今日の文體に成つた。其變遷進歩の順序を見ると頗る面白い、固より今日でもまだ完全ではあるまい、もつと進むに違ひないが、今日の日本の文體を見ると、今を去ること一千年前の歐羅巴と同じことをやつて居るとは恥辱千萬、如何にも幼稚であると言はれても仕方がない。それで又コンマを切らぬが爲

に不都合の起つた事は、曾て英國の國會で議會の決議がまるで反對の意味に解されたことがある。文明の進むに伴れて人の思想は益々複雑に成る、殊に一句と他句との中に、入れ句、入れ文をして様々の條件を附けることもあるから、句讀の切方を嚴密にせぬときは全體の意味を誤ることが出来る。日本の文章には一向それが發達せぬ、吾々が今言文一致の儘で句讀を切つて見やうとしても中々行かぬ、語分けさへまだ出来ぬ。昔から言ふ通り假名の本などを讀で、ベンケイと、ナギナタを一ツに讀み込むやうな滑稽さへある。

以上の所論は素より單純な理屈詰りであるが何分にも千年來行はれたる文字の存廢に關する事だから感情の上からと又此遷り變りの困難を想像して種々の反對論の起るのは無理もない。故に此文字の事は慎重に考慮を要する重要問題で決して急速に輕々國家の力や、法律の力を以て、之を強制的に改正更新するが如きは予の最も反對する所であるが、其他の方法のあら

ん限り音譜式を理想として、成るべく不都合の起らぬように改良の方法を
取りたい考である。

一四 學生立身論

學校が新社會に向て多く有力なる人物を供給したことは争ふべからざる事
實であるが、近來に至つては斯る人物を産すること甚だ少いと云ふ者があ
る。學校を出て、世の中に頭角を現はして居るものは随分多いが、此は遠
くは四十年前、三十年前、二十年前、近くも十年前に學校を出た人で、五
年前や八年前の出身者で餘り有名な人物は寡いと云ふ一段に至ては、如何
にも尤な話である。予は度々斯る悲觀説を耳にする、併しながら是は十年
前にも二十年前にも、事に依ると三十年前にも此悲觀説はあつた。試に銀
坐通りに行て新橋々頭に立て京橋の方を見通せば、京橋近傍には無数の瓦
斯燈が密接して居るやうに見ゆるが、自分の眼前の瓦斯燈はポツリ／＼ま

ばらにしか立て居らぬ。そこで遙か向ふには瓦斯燈か多くつて自分の足元
には少い様に見へるが實際は同様の數である。是が所謂眼の透視的誤謬で
ある又之と同じく心理的誤謬と云ふ事があつて、遠くなるほど密接に繁多
にあるかの如く見へる。現に歴史を見ると昔程豪傑が多く、頼朝も楠公も
秀吉も續々と輩出した様に見へて、家康以後人物が出ないやふに思はれる
のと同じく、當時未だ何の名もなかつた人で今日樞要の地位に昇つた者は
幾人もある、學校の卒業生の如きもの、社會に出るのは恰も梯子段に足を
掛けるやうなもので、其梯子段を一年に一段づゝ登ても三十段上るには三
十年かかる、絶頂迄昇り詰めると誰の目にも見へる、其上、梯子の上に掛
居る半鐘を打つ事も出来るから見へない所迄も響が聞へる、中段迄昇て稍
々人目に付くにも十年や十五年はかゝる、現に去年や今年の卒業生は漸く
一段目か二段目に足を掛けた丈であるが、其代り櫓の上に上り詰めた人は、
モウ棺桶へ片足を突込て居る、又餘り急いで高い所へ昇らうとすると眞倒

さまに轉げ落るから矢張順序を踐む外はない。尤も社會各方面に人物の需要の増すとは盛んなもので、青年の前途は實に多望である、そこで學生が志を立て、次第く各自の長所を發揮して社會に頭角を顯すの覺悟をせねばならぬ、その長所は面々自分で考へて見ても分かる、尙自分丈で疑はしくば教師や友人の説も聽いて見るがよい、親の説も無論肝腎である。而して其向ふべき方面は政事、商工業、學問、種々あるが、先づ之を大別すると實地家と學者との二大種類になる。尤も學問と實地とは益々結付け益々近づかぬばならぬ、實地の役に立たぬ學問は無益である、又學理に叶はぬ實地は眞の實地でない、然しながら人間の種類には慥に學問に適當なる人と、又實地に適當なる人との別がある。偉大なる人物の内にも非常の大學者となつて考込む方の人と、又大政治家大實業家の如く立働く方の人とがある。人間の能力には自ら限りがある者で、兩方面に向つて均一の發達は決して出來ぬ。又均しく學者の中にも高遠なる理屈に得意なものと、緻

密な觀察に長じた者と、夫々長短があつて双方共よく出来る者は稀であるが、トウマスボツクル曰く思想史上只古今獨歩とも云ふべきはセキスピヤであらう、彼の作者セキスピヤ程完全なる腦髓はない、其哲學的理想の遠大なる事は、殆ど古のプラトの如く又近代のカントの如く、天地も尙狭しとする底の幽玄高遠なる思想を有て居つて、而してそれと同時に其觀察の慧敏奇警にして、人情の機微を穿ち社會の裏面を窺ふの點に至つては、殆どサツケリーの如く又デッケンスの如してある(デッケンスは素と速記を練習して、新聞の探訪をして居つたが、下等社會や中等社會の事情を觀察した其結果が、遂に彼れが如き大戯作となつた、實に非常な天才である。又サツケリーの小説は貴族社會の腐敗を指摘し、又富豪や新貴族の弱點を罵つた其筆先きは、恰も切れる剃刀の如くであるが、其代り宏遠な理想には乏しいと云ふ。)又プラトの著レバブリックの如き深遠なる思想の發顯である而かも、其中には實に迂濶千萬な事や自家撞着の事がある。又アリ

ストテレスは推理力に於ては少しくプラトニーに譲るが、實地の考は優つて居る。其アリストテレスでも貸金に利息を付けるは天理人道に戻つた事であるが故に此金利は取る者も取らるゝ者も共に罰しなければならぬと云ふ説を唱へた。今日から見ると案外間違つた事を言つて居る。若し此アリストートルの説の如く今日迄金利を禁止したならば、富力の蓄殖は絶へ、文明は決して是迄に進歩しなかつたそれから英人トーマス、モールがプラトニーのレバブリックに倣ふてユートピヤを書いた、其理想たる、黄金世界の想像である。其黄金世界で喰ふべき食物は誰か作るかと云ふに、是は矢張奴隷に造らせると云ふて居る、人類を牛馬の如く賣買使役する奴隷制度が黄金世界に存在するとは随分辻褃の合はぬ話である。其後社會學者にては佛人のオーギュスト、コントが出た、實にデカルトに續いての大學者で、(此人は數學の教師をして僅かに糊口を凌いで居たが、其間に實驗哲學の構造に勉め有機學及社會學にも無機學同様の研究法を應用するの至當なる事

を悟つたのである、乃ち彼は之に依て社會研究を初めたが爲に、今日の社會學も起て來たのである。此哲學改革の初念を發したのが僅かに十四歳の時で、恰かもペーコンが十三歳の時に、アリストートル傳來の哲學を轉覆せんと云ふ志を興したのと、誠に一對の好話となつて居る。)其理想力のゑらい事は驚嘆に堪へぬ程の大學者ではあるが、其哲學主義から演繹し來たつた政治組織に至ては如何にもまづい考案で、小學生徒でも抱腹絶倒するやうな説をまじめに唱へたとは馬鹿くしい云々、併し其哲學主義の社會學を利益した事は争へぬ。尤もコントの哲理其儘では世間に擴がらなかつたが、然るにボツクルが之を祖述し、通俗的に社會の實相に應用して、彼の有名な文明史を著述してから、其主義が各國に傳播し、明治七八年頃は我が日本迄も風靡したが、既に其以前から露國に流行して農奴解放の素因とも成つたのである。露國の内地、如何なる僻村にもボツクル氏文明史の翻譯書の一冊や二冊ない所はなかつた。又田舎の圓太郎馬車の小僧迄も之を讀み

ながら馬を御して居つたと云ふ事は、彼のワレス露西亞紀にも書いてある。是れも大陸の空論が英人の手に依て通俗化された一例であらう。フレデリック大王は彼の佛人ゾオルテイヤを敬愛してポツダムの宮中に寢食を共にした程であるが、其フレデリック大王でも若し自分の領分を失はんと欲すれば、哲學者に政治を任せるが一番の早道だと皮肉な惡口を云て居る。學者としての能力を發達せんとすれば、實地に就てはどうしても迂遠になる、實地の方に敏捷になれば深い遠い考は出來ぬ。兩方に向つて行けば兩方共淺くなる、丁度學生の近視眼、漁師の遠視眼の様な者で、使用する方に偏するは數の免れざる所と見へる。又實際的に働く人物になると深い理屈の分らぬ事が中々に多い、彼のロバートピールは實に絶倫の政治家であつたが、最初は入穀税廢止に大反對で、アダムスミズ派の議論が容易に頭腦に入らなかつた、リチャードコブデン等の入穀税廢止論が第一流の人々には充分認識されて居るのに、又ピールは之に反對を唱へ、其説が第二流の稍

多數の人の頭に這入て來た時分には夫子自からも熱心之を主張するに至つた、此如き所が即ち立憲政治家として多數を率ゆる所以であらう、併し決して策略上殊更にやつた譯てはなかつて實は全く解らなかつたのだと云ふ。尤も政治家と云ふ者は餘まり世間未發の眞理を先に見過ぎると、相場師の早耳と一般で却て失敗する事が多いと云ふのは、世間の俗人を相手にするが政治である其上に人々の利害得失に關係する事がちであるから矢張ピール流の人が成功する、グラッドストーン杯が熱心に耶蘇教を信仰する所は、決して英雄人を欺くのも何でもない、當人は眞面目なものでそれが丁度一般の人氣に合つて行く、日本の大政治家連にも、方角を見たり日柄の吉凶を心配する連中があるが其邊が丁度よいのであらう。是等は兎に角實際家の深い理屈に迂なる事は其弱點には相違ない、學者も實際家も夫々本領があつて、其本領内に發達を圖るのが成功の要件だ、素より人々の能力にも等級があつて、皆第一流に進む譯にも行まいが、行ける所まで行くのが人間生々

の約束であるから、どうしても夫れ丈の事は爲さなくてはならぬ。詩人ミラ
ー氏の言の如く世に天才と云ふ者はない若しあるとすれば非常の勉強力を
有つた人だと、是は實に名言である。大に勉強して人の忍ぶ能はざる所を忍
んで行ると云ふ人が豪くなる、彼のロベルトピールの如きは彼程多くの事務
を處理し彼程勉強した人はないさうである。ウィツヤムピットにしても同じ
事である又近來にゑらかつた人は倫敦タイムスの社長デレイン氏である、彼
の小ピットは二十一歳で國務大臣に昇り二十四歳で總理大臣に成つた人であ
るが、此デレインはピットと並び稱すべき人、二十一歳でタイムスの主宰に
成つたと云ふのは大層な話である、日本で言へばナニ新聞屋の頭かと云ふか
も知れぬが左様ではない、タイムスの新聞を造る爲に世界中に關係する所
の人を數ふれば殆ど十萬人を使役して居る。地球上の出來事を洩れなく毎
朝社會に報告するのは非常な働きの有る人でなければ出來ぬ。此人が三十
五年の間毎日午前十時から出社して翌曉の二時まで執務し、事に依ると夜

が明ける。議會の開會中には英國では會議が夜半乃至曉方迄あるから一日
も缺席なしに三十五年間勤続したと云ふ、何れも名を現はし功を遂げた人
は、皆非常な勉強非常な忍耐非常な精力を有て居る。尤も非常に有名な怠
け者で豪い人もある、例へば彼のバイロン卿と云ふ大詩人は、實に甚しい
怠懶ものと言はれたが、人は其外面丈を見て一概に懶惰と云ふ譯に行かぬ、
彼のデレインや、ピール、杯の如く仕事師風には働かぬ、只ぶらぶら遊ん
で居る様でも其頭の中は時計の針の如く廻轉して、所謂苦吟慘澹と云ふ狀
態であつたに違いない、又飛驒の甚五郎と云ふ豪い工匠は非常な怠け者で
滅多に仕事を爲ぬ、平生は只懶けて居つた、しかし仕事に掛ると驚くべき
傑作：活た京人形や大黒を雕るとか云ふやうな名工であつたが、彼でも決し
て遊んで居つたのではなからう、常に頭の中で考へて居たらうと思ふ。人
と話をして居ても鼻は此人の如く雕て見やう、眼は彼の人の如く雕て見や
う、彼奴の顔色はヒョットコを雕る時の參考に、此女の面相はおかめの時

の標本にしてやらうと云ふやうな事を考へて居つたらうと思ふ、若し親方が怠けると云て叱かりでもすると、甚五郎の方では小言の方は馬耳東風で、成程人の怒つた時はあんな風に口が曲がる、こんな風に眼がつり上ると云ふ様に、顔面筋肉の動き方でも研究して居たに違いない。名人が傑作を出すには始終コッ／＼やつて居るやうでは、中々傑作は出来まい、平常考へ盡した揚句に今日こそは一ツやらうと云ふので傑作が出来る。書家に揮毫を頼んでも絹地を取込んだなりで容易に書かぬ。豪い書家や畫工は怠けものだと云はれるが、當人の方では、天氣の模様、氣分の工合等種々の要件が備はらなければ、能く出来ぬと云ふ様な事があるに違ひない、矢張り大成する人は外形は懶けた風に見へても、心の中は非常に勉強し他人の知らぬ所に苦心する、それを知らずに外面丈を見てバイロンや山陽を氣取て遊び歩く才子は、所謂才子才を恃で失敗に終はらなければならぬ。然らば學

生の學ぶべき方面は色々違て居るが、併し之を大別すると實地家と成つて社會に立働き、學者となつて世を益するかとの二つとして見た所で日本には兩方共に缺乏である。實際の方の人物にも乏しいが、學者の方も實に幼稚なもので第一著述らしい著述さへ顯はれぬと云ふ有様である。大抵燒直し何か詰らぬ憐れなもの計り、素より創始的のものはそんなに人間に望まれるものではない。歐羅巴の學者でも全く創始的思想を頭から練り出すと云ふ事はない、十九世紀間の最上の名著として有名なるミル氏自由論さへ、フンボルト氏官民權限論から脱體したものである。皆多少づつ先人の考へたことを増補しては次第に學界の資本を増大する、たとへば經濟學で云つてもアダムスミスが佛國ケスネーの説を聽てからはじめて自由貿易經濟論を唱へると、其が段々布衍されて次にはマルサスの人口論、リカルドの地稅論と段々に布衍して來て根據が出來て夫から次第に發展した。その一方

には英派に對する佛獨米等の反對派が起る、互に切磋琢磨して追々進歩して來た、又此のマルサス人口論もラマルクの動物論に因原し此の兩者の研究から關連してダルウインの進化論が起るようなものである其の他何れの學科に於ても皆然らざるはない、是れが歐米文明の源泉て之れに貢獻したものは學者の一類即ち思想界の人々に外ならぬ。素より學者の中にも六ヶ敷い原理を考出す人物もあり、又六ヶ敷い道理を分り易く巧に面白く説述して世間に紹介する人物もある、廣く社會の人心に感化を及ぼしたことは後者の方に多いは勿論だが、前後兩者相俟て初めて完全に世を益することが出来ゝ。素より日本人も創始的の説を出す事は出来るに違ひない、又西洋人の説を増補して立派な著述が出来ゝるに違ひない、目下は尙彼れの思想を通俗にして世間に紹介し、よく日本の事情に適應せしむる事をも勉めねばならぬ。眞實に忍耐と熱心とを以て學事に全力を注ぐ時は、立派な著述

が社會に現はれるに相違ない、夫には矢張日本人も學者は學者と己れの分を定め、其分に向つて専らにならぬと可かぬ、彼の學者が行政官を兼ねる様な風がある間は駄目である、學問に適する人は其道に依て其材能を發達させると云ふことは甚だ必要である。文學の方面の如きは最も學者として世に立つべき人物を養成する。又外の學問をやるにしても文學の思想はなければならぬ。文學に身を投じ大成を期して大に研究し、高尚なる學者生活を送らうと云ふことも大に宜い、今回再興の我文科は先づ新聞記者、教育家、著述家として身を立つるには最も都合のよい學科である、其他凡て紳士として世に立つ人には其職業の如何に拘らず文學の嗜みはなくてはならぬ、教育ある士君子として社會に重きを爲すには、是非とも必要な學問であることは言ふまでもない。

一五 學生の今昔

過去、現在、將來の三つの間に決して尊卑の別はない。先づ一國の歴史一個人の履歴經驗と云ふことが甚だ大切である。學問上に於て過古を以て將來を推究し大發明を成すこともある、併し實際の經驗に據ると、日本人が兎角過去を尙び過るやうに思はれる、日本人は漢學の感化を受けて、支那流の尙古主義に化して兎角古を尙び、今を卑しむの癖が強い。此思想が大に進歩を妨げ發達を害して居る、此尙古心なる者は實は衰頹する國民に喰つ付いて居る觀念で、例へば朝鮮京城の鐘路と云ふ辻に頗る大きな釣鐘がある。又芝公園五代將軍の廟に朝鮮國献上と云ふ結構な青銅の門がある、斯る奇功大作は今の韓人にはとても出來ぬ。之に由て見ると今の朝鮮人が古人を尊ぶも怪むに足らぬ、近い二三百年前でさへ其通りであるから、中古は豪く太古は一層ゑらいと云ふ觀念は自然に起る。支那に至ると此觀念は尙強い、漢書は勿論西洋人の調べを見ても、昔の支那の人は中々立派なものであつたらしい。之に徴しても古尊今卑は亡國の徴で餘り頼母しい事

ではない、歐羅巴でも尙古主義の西班牙の如き、一は大に繁昌した國であるが、今日はアノ通りの有様に陥つて居る。之に反して、亞米利加人は昔が尊いなど云ふことは思ひも依らぬ、只將來に益々豪くなると云ふ考へを持つて居る。彼等も古い歐洲から移住したのであるが、これは全く其境遇の然らしむる所であつて、所謂居は志を移すの理合か、皆々此新進の氣風になる、隨て其仕事の規模も大きく、近頃彼のソルトレーキの湖水に二十八哩の長橋を架して汽車を通じるとか、又市街の家屋は三十八階迄高まつて來た杯云ふ勢で、凡て舊慣古俗に拘泥せぬ事は、一般の人事に普及して居る、例へば身邊の器皿文具の類の如きも、成丈新らしい物を喜ぶので、古いから面白とか時代が付てるから貴いと云ふ感念迄も全く無い様である。乃て日本は古來進歩の歴史を續けて來た國で、決して他の東洋諸國の如き衰亡的歴史を持つて居らぬにも拘らず、實際に尙古主義を奉じたのは、全く漢學教育の感化に外ならぬ。勿論米國流には行かぬ、歐洲各國とても

同様に舊慣古俗に支配されて居るが、しかし衰亡的歴史を有する東洋諸國の如くなる筈は、此日本に於て有られぬ、全く支那の感化である。支那では古人は賢人と云ふ意味を持つ迄に成て居る、支那では事實も其通り古代ほどゑらいかも知れぬが是は日本には適用されぬ。成程古人の作つた歌は佳い、百人一首は立派な歌ばかりと云ふが、あの王朝の永い間にドノ位人が歌を詠んだか知れぬ。殆ど上流社會の教育は和歌が主眼であつたから、何十萬の歌が出来たかも知れぬが、よい者はタツだ百しか残つて居らぬ。後世の長唄や端唄なども昔の者はよく出来て居ると云ふが、これもよいから残つて居るので、惡いのは人が謠わぬから消滅し、只其内のよいのが残つたのである。又老人達は昔の者は強い、此翁は今年八十八になるが車にも乗らぬ、今の若い者は弱虫計りて役に立たぬと云ふ、ソレは強いから八十八迄生残つて居るので、弱い人は皆天死して仕舞た、これは大體の話として茲に捨置き難い一條は、近來學生の墮落談が非常に喧しく新聞に演

説に茶話しに此問題が出る、隨分或點に於ては墮落したと思はるゝこともあるが、これも能く解剖して見ねば其真相が分らぬ。維新前後三四十年前の書生の有様を以て、今日の學生の有様に較べたならば、隨分アノ時代の漢學生が、ボロ袴を穿き片跛の下駄を穿いて雲か山かを怒鳴つて歩いた時の、所謂、書生天下の暴ばれ者はどうであつたか、其時分は書生の數が少かつたが、若しも假にあの書生風を其儘に今の都下十萬の學生に移したならば如何、若しあの時分の天下の暴れ者が今の學生の人數位、東京市中に住んで居つたならば何うだらう、それこそ大騒ぎを起すに違ひない、逆も警視廳でも何でも押へ切れるものではない、大なる騒ぎを起すに違ひない、風紀上衛生上不潔不行儀極る輩で、今の學生とは非常な相違である、現に學校廻りの貸本屋杯が、甚だ亂暴な書物や猥褻な繪本杯を擔ぎ廻つて商賣になつて居つたような有様であつた。或人はコレに反對して成程以前の書生は虱も湧かして居れば天獄羅の立喰そばの喰逃げをしたかも知れぬが、

却てその末節に拘らぬ所が面白い、殊に其尊い所の武士氣質は、今の書生のやうな懦弱な無氣力なものとは違ふ、随分罷り違へば人と決闘もするし、國家の爲には生命も惜まぬ、其精神が頼母しかつたと云ふ。それは時勢の相違もあつて一概には云へぬが、第一その當時の書生は多く士族の子弟のみで、武張つた者も多くあつたが、今の學生は社會の各階級から出て居る、しかも今日では各階級が皆昔日の武士以上の武勇な働らきをやつて居る、學生も一朝筆硯を投じて戎劔を提ぐれば、皆魁々たる武夫ならざるはない、之に由て見れば必しも立喰や亂暴と大和魂、武士道とは關聯した者の如く見る譯にはいかぬ、此論者の説も矢張己れの若い時の事が宜い様に見へる、兎角古い事がよかつた様に見へる、彼の一種の尙古病に犯されたものである。尤も新聞上の墮落云々も事實に於て歴々證據のあるとであるが、これは學生の名稱の下に劣等の少年少女が都會に集まつた爲めに生ずる現象である。學生本來の實質は最近十年間に大なる進歩をなしたと斷言する外は

ない、然らば學生の近情を以て大に賞讃し得るかと云ふに、十年前に比しては優つて居るが、大に宜いかと云ふに中々さう云ふ譯には行かぬ。實に不完全な幼稚極まるものであると斷言しなければならぬ、其一例を言へば、試に圖書館にても行て見ると、入口には妙な檻を構へて、一人づゝグ／＼出入させる。又中に這入つて本を借るにも非常に面倒な手續をしなければならぬ。それでも兎角書物が失せたり書物に面白い圖でもあれば切取るとか云ふ仕末、之に由て見れば學生德義の程度が甚だ低い者と云はねばならぬ。又今日の學生中には學校に學びながら學費を濫費し月謝を意納するものがあると云ふ、如何にも不徳義極つた事ではないか、學生として斯る惡習を養ふものは他日社會に出て不義不信の人となつて、國民として納税の義務を怠り、商人としては取引先きに違約したり、不渡手形を出す様の人間に成る、此の如き者が今の學生中に多くあると聞いては、實に歎息に堪へぬ次第である。此外にも類例を掲ぐれば多くある、畢竟す

るに數十年間に於ける學生社會の進歩は大なるものであるが、先進外國の學生に比して尙大に劣つて居る。彼國の圖書館杯には斯の如き究屈な制限は無い。それでも讀書室で音讀談話などするものも無い。實に寛大自由、銘々が勝手に本を出して勝手に読んで勝手に元の棚に仕舞つて置く、それでも書物が紛失する等の事は決して無いと云ふ。全體人間と云ふものは餘り嚴重な取締をして盗人扱ひにすると段々悪くなる。しかし其自尊心に訴へて之を待つに士君子を以てする時は自然と正しくなつて大人しくなる、彼國も昔から此通り立派に公徳が行はれて居たかと云ふに決してそうではない、百年前の學生の公徳に乏しかつたことは甚しいものであつて之を表する紀念物は色々保存されてある。丁度今の日本學生は彼等の百年前に似て居るかと思ふと情ない。しかし此長足の進歩を以て世界を驚かす日本であるから、彼國の百年掛つた事は十年でやつ付ける、殊に學生と云ふよく利窟の分つた少壯の仲間が申合せて奮發すれば、十年は尙か三年も掛らな

いて、此れ位の事は改良が出来るに極つて居る。尤も圖書館丈では仕方がないが、全體の公徳進歩に向て一鞭を加へ、一日も早く文明の面目を發揮しなければならぬ。現在の有様では如何に戦争に勝ち一等國と云ても堂々たる文明國として世界に立つ譯には往かぬ。學生たる者は徒らに過去を標準とする事は止めて、大に將來の發展を期し、學生全體の品位を高める爲には、自ら標的とする所が無くてはならぬ。又之に達する爲め的手段方法が無くてはならぬ。其標的は即ち獨立自尊の人となるのであつて、其手段方法として最も有力なものは、成べく獨學自修の習慣を附けなければならぬ、今の世間に多い學生は何をして居るか、只教師の講義を筆記し暗誦し、自己の研究に依て腦髓を鍊ると云ふ事は皆無である。勉めて此惡習を破り先づ圖書館及其他の方便を利用して、獨立の學問をなし、教師は單に其指導者と考へる位にならねばならぬ。有形學で云へば所謂「ポレトリウア」をやらなければならぬ。又體育を盛んに

遣つて勇氣を養ひ、徳義を練つて心身の活動力を作らねばならぬ。又凡て人生には娛樂の必要がある、古來禁樂説が流行るが之れは大に悪い、只其快樂が高尙純潔でさへあれば宜い、殊に血氣盛んな壯年に快樂がなければ、内氣な者は鬱愛病を發し、活潑な者は放縱に流れる外はない、其娛樂の種類は成るべく多數共同の者が宜い、運動、音樂、繪畫杯は至極宜い。即ち社交的娛樂を奨励する必要があると思ふ。今一つ大切なるは家庭との通信を絶へぬ様にしたならば、學生々活の單調を破り温乎たる情致を生じて、不潔な惡風に染まぬ様になる、兎角學生の墮落は家庭を忘れる所から起るのが多いのである。又學生には寄宿生通學生下宿生の三種がある。寄宿生は寄宿舎共同の住居を圓滿に高尙に清潔にして獨立自尊を實現する所の團體たらしめ、下宿も亦同じ事で良い人が居つて互に切磋琢磨すれば他の人も自然に良くなる、尤も間違つた下宿屋も都下には多くあるが、コレは下宿許り咎める譯に往かぬ、下宿人の責任もある、往年來教育社界には公認

下宿屋論なる者が行はれ、又實驗もしたが却て害あつて益はない、西洋邊にある如く學生丈の爲めに特に成立て居る小都邑ならば、都邑全體が學校行政の下に在る譯で始末がよい、東京のやうな所では此の如き仕組は逆も行はれぬ、しかし斯る表面的取締を行はずとも、裏面的監督を以て下宿屋一般の改良を促がす事が出来ると思ふ。下宿公認法ではなくつて下宿非認法と云ふ事をやるがよい、どんな事かと云ふに、別に六ヶ敷い事はない、評判の悪い下宿に居る者は登校を許さぬ丈の話である。要するに青年の學生は此自由なる境遇に居て、完全なる自治的品性を造り、獨立自尊の精神を養ひ、社會に出て立派な人となる心掛けがなければならぬ。

一六 學問の將來

科學なるものは何を目的として居るかと云へば、物の原因結果の關係を研究して、如何なる原因によつて如何なる結果が起るか、同種の原因は同種の結果を生じ、異種の原因は異種の結果を生ずるといふことを認知し、一定の定則を突き止むるものが科學である。科學の定則がきまつた以上は、之を以て事物を未然に推測することが出来る。此の科學中に就て最も進歩したるものは天文學である、此學は諸科學の王と稱せらるゝほど正確なものである、星學上の現象は其未然に前知することが出来る、而かも一分一秒も相違する事がない、其の測算の正確を保つが爲めには觀察者の神經作用の遲速までも計算の内に入れる位である、何となれば先づ光線の速力は一定して分かりきつて居るが、其の光線が觀望者の眼に觸れ視神經を通じて腦に感知する迄の隙は、其の人の神經の利鈍に依て遲速の相違がある。其の

相違までも考算して誤謬を少くするのであるから完全とは云へぬ迄も、先づ餘程完全に近づいたものと云はねばならぬ。然れども天文學は純然たる學問であつて、唯人間は之に依て天體の運動を未然に推知することは出来ても、之を應用して其の運動を毫末も左右する譯には行かぬとは云ふ迄もない。即ち天文學はあつても天文術と云ふものはない、然るに化學とか理學とかになると、その學理を應用して種々の技藝が出来る、科學は原則を發見し、技藝は之れを實地に適用する、尤も實際は歴史上に於て科學の現れざる遠き以前から技術は行はれて居る。例へば農業にしても數千年の昔から何の學問もなしに經驗上やつて來た、少しも學問から起つたとはない。漸く近代に至てから化學者が此農業を自己の領分に入れる事に成て、どう云ふ性質の草木にはどう云ふ土地が適する、どう云ふ肥料を以て之を培養する。今日の農學など、云ふものが不十分なから出來た譯である。即ち是も科學の應用から起つた技術の一である、併

しもつと氣象學の進歩といふものが起らねばならぬ。これが起らねば、いくら人間が骨折つて肥料をやつて畑を作つて居つても、風が何時吹いて來るか知れぬ、それが爲めにどう云ふ災難が來るかも知れぬ、何時旱魃が來るかも知れぬ、何時霖雨が來るかも知れぬ、此風雨旱魃等の爲に、農業上に思ひ設けざる災難に罹ると云ふことが始終ある。之が爲に折角の骨折も、全く徒勞に歸してしまふ。米が平作より二割も餘計出來れば、非常な豊作だと云つて喜んで居るが、是が毎年此通りはいかぬ、是はまづ氣象學といふ者が大に進歩した曉には農業も大に進歩し得る道理である、但し日本の米作の如きは其性質上から此國には不適當のものである、稻の實る時分が丁度風の吹く時と云ふことは、數百年の經驗に依て分りきつて居る。しかし米を實らして置いては風の爲めにやられて悲んで居る、偶々順當に行くと何か拾ひものでもしたやうに喜んで居るが、作つたものが出來るのは當然の事ではないか。米食の熱帶國から移つて來たのでもあるまいが、

古來三種の先天性の如くに米を作て喰て居る。奥州邊の凶作は頻々たるものであるにも拘らず、尙北海道のやうな寒冷な氣候でも無理やりに水田を拵へて、米を作て居る、又どうも米を食はぬと人間らしい心持はせぬ、これもよいとして成るべく安い外國の米を食つて、内地の寒い地方杯は自らその氣候に適した物を作りさへすれば宜いのである、向ふ側の西貢邊に行けば米は肥料なしに三作も出來るのである、其理窟は分る人もあり分らぬ人もあるが、まだ其處までは容易に變化することが出來ぬやうに見ゆる。要するに農業もまづ化學及び氣象學等を應用して今日の如き馬鹿くしき境界を脱するまでに進まねばならぬ。

學問は事物の原理を研究し、技術は之を應用すると云ふことになつて、十九世紀二十世紀の文明が發達した但し哲學は随分印度の昔にもなか／＼發達して居る、希臘にも發達して居る、今日も哲學は大に進みつゝあるが、哲學の理窟と、科學の理窟との間に於て何も異なる譯はない、唯科學を統一

して最も廣い深い所まで考へ込んだものが哲學である。さうして見ると今日謂ふ所の哲學なるものは、まだく幼稚なものと謂はなければならぬ。即ち其科學なるものは、各科の一局部々々の事を研究したものが科學になつて居るが、之を統一して非常に深遠なる處まで漕付けたものが哲學であつて、統一せられたる科學即ち哲學であると云ふことにならなければならぬ。此解釋が若し正當ならば、總て科學を統一したものが、眞の哲學であらうと思はれる。然るに實際歴史上に於て此哲學なるものは、未だ科學の發達の充分でない時代に發達したものである。素より科學は古來の哲學からも力を借りて居るには相違ないが、併し科學の方は主として、歸納法に依て進んで來て居る、事實を調べ物質を驗して歸納したる科學を統一總合した立派な哲學といふものは未だ出來て居らぬ。近時歐羅巴科學の進歩は全く歸納法に依つて出來た。ベーコンが出て、アリストートル以來の演繹法を排斥してより此方、全然歸納的研究方法に依つて、現實的知識の

進歩が著しくなつたと云ふことは疑ひもないか、餘りにその一方に偏し餘りに之を崇拜して、何でも事實と實物何でも經驗と觀察の極端に走り過ぎた爲めに學問を段々分離の上にも分離せしめて、益々専門的になつて個々には益々進んで來た。そこで又斯う細かく専攻分修の一方に傾いて、學問と學問との相關點を失ふに至るの危険がありはせぬかと云ふ心配が、段々近時の學者間に起つて居る、之を救ふの道は他の一方に於て演繹式に総合的に研究し、物質や事實を離れて純然たる心裡の思想に依て進まねばならぬ。斯る方法を以て全體を總べると云ふ者がなくては、學問の統一といふことはどうしても出來ぬと云ふのであるが現に歸納一偏の時代と云はれて居つた時から、バックル氏は夙とに之を唱へ二大發明家の研究法を論じて云く、學問の大發展を惹起した大發明者たるニュウトンの如き偉人になると、一面には分析的に研究すると同時に、他の一面には総合的に全體を統轄して考へる。ニュートンの如きは即ち近代學問の泰斗で、多く歸納式の

人と云ふことになつて居るが、決してさう計りもなく其の一大發明は大に演繹式に助けられたのである。と云ふことは物理學や論理學の諸大家の説である。引力の定則を發見したと云ふのが、近代の學問の發展の一大本源である。それはニュートンが果樹園の林檎の落ちるのを見て思付いたと云ふは、誰も知る有名な話で、或は是れは詩人ゲーテの面白く作つた物語だとも云ふ説もあるが、假令さうでなく實際の事實としても是れは只その動機となつた丈けて先づ林檎の落ちると云ふ一小事實を以て、宇宙間に互る所の大法則を發見したと云ふのは、元來ニュートンの頭の中には、宇宙間に擴がる所の定則を發見しやうと云ふ、非常に廣大なる頭腦を有つて居た所を、それをちよつと針で突くやうに刺激したので其の大頭腦の機關が活動し推理より推理に涉り寧ろ演繹的に發見したもので、決して歸納的に實驗だの計算だのからしたのではない。木から林檎が落ちた、子供が見て居つたならば、拾つて了ふと云ふだけ、ニュートンが見るとちよつと考へる、

何故此の林檎が下へボタンと落ちるのであらう、横へも飛ばず、上へも上らず地球へ落ちる。若し此の木がもつと高くても矢張り同様地上に落ちるに違ひない、いくら高い木でも同じことであらう。木の高さが百間千間でも同じ理窟だ、さうすると天空に高く見える月とても同じこと。惑星とても同じこと、月は地球の方へ落ちんとするので軌道を廻轉するごとく、諸惑星も亦た太陽の方へ落ちんとするので其の周圍の規軌を轉道する、此の道理は宇宙全體の天文系統に通じて同一なる筈であると、唯思想より思想へ進んで高遠無邊の大理想に到達したと云ふことである。

更らに驚くべきは大きな頭腦になつて來ると美といふ考から理に及ぶことがあり、理といふ方から美に及ぶことがあると云ふ。例へばゲーテは其傳記にもある如く偶々ベテスの共同墓所を散歩しつゝ詩想を練つて居る内にふと一個の頭蓋骨を見た、之を拾ひ上げて色々と考へたが、此頭蓋骨といふものは脊椎骨の上端の擴がつたものであると云ふことを發見した。是は

元來解剖學者が考へ出すべき筈の處が、之に縁の遠い詩人のゲーテの發明する所となつた、此大發明が最初の内は醫者學者の社會に於ては頗る冷遇せられ、何んの詩人などにそんな事が分かるものかと云ふ調子に輕視せられたが、眞理は到底葬られ得ない、次第に學問界に信仰を得て、遂に此發明が解剖學上に大革命を引起した。又ゲーテは植物學にも大發明をなした、植物の花瓣花蕊花萼花莖等花の各部も皆これは葉の變形に外ならぬ。つまり花とか葉とか色々言ふが、やはり皆葉であると云ふことを考へた。是は植物學上の非常な發展を來し、それから又進んで生物學上に非常な發展を起して來た。生物學上に於て葉といふ者は、自己の生長機關、花と云ふ者は生殖機關、プロダクションとレプロダクションである、吾々が茄子を作つてもあまり肥料を遣り過ぎると、木許りが大きくなつて葉は多く出來るが肝心の花が咲かぬ、又咲いても實を結ばずにあだ花になる、動植物は第一自己の生長、自己生長が已むと後系者の生殖となる、即ち自己生存

及種族生存の天則に従ふのである、頭蓋骨は脊椎骨の展開であり、また花の各部は葉の變形であると云ふ大法則を發見したのが、解剖學の大家でもなくまた植物學の大家でもなく、全く商賈達ひの詩人に依てなされたのは、如何にも不思議な様であるが、其の實は不思議でも何でもなく、全くゲーテの熾なる想像力と美を愛するの熱情と豊富なる思想とが結付いた濶大なる眼光を以て、高い所から自然界を瞰下するから専門學者の眼に映せざる所を達觀する事が出來たとの事である。最初の間は學者社會も詩人の分際として學者の領分を侵すとは怪からぬ越權である、會て顯微鏡だに手にせざる空想的の詩人、徒らに平仄を弄し又は戯曲を編むを事とするゲーテが、何んとして堅實なる科學界に足を踏入るゝことが出來ようかと息さまいたが、遂に眞理の面前には平身底頭するに至つた之は實に面白い事實ではないか。云々どうしても今日科學を分類して差別的に研究するが他の一方に之を無差別的に總合する研究が盛にならなくてはならぬ。既に彼の勢力不

滅説及勢力變形説の如き電氣も熱も光も又神經力も同一勢力として、無差別に考へる所の總合思想が十九世紀の後半に於ける理學の大發展を起したのである否、而上の學問も大に變遷し大に發展したのである。斯くの如く總合的に考へる所の無差別的思想を有つたる偉大な頭腦が、此學問界に非常な發展を促がす。が又物質上に於ても最近の出來事たるラジエームの發見は如何なる結果を生ずるかも知れぬ。乃ちニエートン、ゲイテ、フアラデーの如き偉大な人物は、稀れに現れもするであらうが、その顯れると否とに拘らず今後の學問界に於ては各方面に分派して、差別的分拆的思想を以て學問を研究する者が多くなると同時に、之を無差別的總合的に高い上から見る研究法が段々盛にならねばならぬ。これが則ち十九世紀に異なる二十世紀の學問の特色であらうと思ふ。

一七 商業教育に就て

商業學校は成るべく實地の役に立つ人間を養成するの目的であるが、事實に於いても其の成績が頗るよく擧がつて、是迄の卒業生も大いに商業社會に用ゐられて居る。會社、銀行は勿論、個人の商店、殊に近來大阪邊の古風な商店などが、此の卒業生を採用するの傾向を生じたのは國の爲めに最も悦ぶ所である。舊幕時代に於いても商業教育はあつた。然らば何がその當時の商業教育であつたかといふに、即ち小僧——丁稚——年期奉公、あれが商業教育で、無論貧家の子弟が其の多數である。しかし雪の日やあれも人の子樽拾ひばかりでもない、随分立派な商家、富豪の子弟も全じく此奉公人となつて商賣の修業をした。第一に大阪、京都、江戸、此の三都をはじめとして大都會には其の近傍の各地から奉公に出掛けて、大きな店で此の商業教育を受ける。教育と云ても學科の教育ではなく、只だ實地見習ひで、仕込まれるとか、辛抱をするとかいふので、西洋のアップレンチスシップ、即ち徒弟教育である。先づ關西地方の金持町人の息子ならば、一

且大阪に奉公に出して所謂他人の飯を喰はせ、一通り辛抱してから親の後を繼ぐことになつた。しかし貧家の子弟は是れと異り、多年の間主家に奉公して、一人前にならなければならぬ。長く謹直に奉公さへすれば暖簾を分けて貰らふ、即ち一軒の出店をさせてもらひ、主家の屋號を與へられて伊勢屋とか、尾張屋とかいふものになれる、是れが大願成就の時である。此の大願を成就せんが爲めに、何十年も後生大事と奉公するのであるが、さて實際になると中々其の通りに成功するものは意外に少ない。世間各種の職業に就いて見ても、醫者や辯護士の大いに流行して、多くの診察料や代言料を取る人を見て、自分も醫學を學ぼうとか、法律學をやらうとかいふものもあるが、其の多數は失敗に了る。何の商業も成功したものだけを見ると大いに割がよさそうであるが、多數を平均して見るとそう旨くは往かぬ。ずつと極端の例を言へば盜賊は人の物を唯だ取つて來るから誠に割がよさそうである、そこで折々利口な人間は大發明をして、太く短く泥棒

するのがよからうと思つて、さてやつて見ると案外細く短くしかゆかぬ。先づゑらい奴でも其の取高を平均すると、一ヶ月二十圓位にしかならぬ。しかし巡查の月給は十二三圓だといふから、十三圓の巡查で二十圓の泥棒を捕縛するとすれば、差引き社會は七圓儲かる。といふのも餘り目の子勘定すぎるかもしれぬ。

今日の自由競争に放任して置いても、人間の事は色々な故障があつて成功者の割合は斯の如く甚だ尠ない。其の上に此の小僧、丁稚の進路に向つては、自然的障害の外に猶ほ人爲的障害が横はつて居つた。人爲的障害とはどんな事かといふと、随分慘酷な話ではあるが、此の小僧を粗衣粗食でこき使た揚句の果に、暖簾を分けずに濟ませやうといふ計略をかける、此の暖簾分けの大願が小僧共の望み通りに悉く達せられては、本家本元の本店が自然小さく成つて仕舞ふ、勢ひ何とかして是れを制限しなければならぬといふ必要がある。どうして制限するかといふと、先づ其の小僧が段々大き

くなつて、二十二三にも四五にもなつて、大分生心も付いて来る、早くいへば道樂の一つもして見たいといふやうな氣になつて来る、丁度其の時分に幾許かの金を與へて通勤を許すのである。是れ迄は始終店に寝泊りをし、店用の外は一寸も外に出る事の出来ない窮屈な生活をして居つた者に、先づ幾千か纏つた金を與へて、自分の家から通勤をして宜しいといふ事になる。と恰も籠を出てたる鳥の如く、大抵の者はそれで以て放蕩をはじめて身を持ち崩す、主家に於ては是れを口實とし放逐して仕舞ふ、小僧は泣きの涙で數十年勤めた店を放逐されるといふ悲劇、如何にも殘忍刻薄のやうであるが、是れも人世には免れぬ事である。丁度佛蘭西の民法は長子相続の法を廢して、家の財産を衆子に等分することになつ居る、しかし家の財産を子供に分配すると家が小さくなるから、末の子供を坊主にするとか、成るべく子を生まないやうにするとか、甚しきは墮胎をする、佛蘭西の人口が殖えず、却つて減るといふのは、種々の原因もある中に、大いに此の

法律が影響して居ると云ふ、自分の子に財産を分けるのですら惜しむのが人情である、況んや他人の子に財産を分ける暖簾を分ける、得意を分けるなどといふことは、之を惜しむのも此卑劣な人間社會には有勝の事であらう。成程一方からいふと二十年も勤めた者を、苦肉の謀を以て叩き出すとは實に酷い事であるが、併し世の中は何時も春風のみが吹くものではない、裏面には随分酷烈な、殺風景な事のあるのは、昔も今も變りはない、これが先づ昔日の商業教育である。是れは強ち日本のみでなく、西洋諸國でも同様の徒弟教育であつたのが、近代の文明社會となつては、此教育法でいかぬといふ事になつて來た。兎に角昔日の商業立身法は、先づ此の窮屈な道を踐む外はなかつた、今日の文明社會に於いて、自由に自分の羽翼を伸ぶことが出来るやうになつたのは非常に結構なことであるが、併しながら夫れと共に世の中も段々はげしくなつて來て、種々の原因が働いて人の成功を助けると同時に、又是れを妨げる方の分子も働いて居るから、困難は

益々多くなつて来る。勉強の効能は今日の方が能く現はれるが、懶惰の罰もまた觀面に來る。學者は是迄種々なる研究を積んで、人生の幸福を進めんとして先づ多くは平等論を唱へ、現社會の不公平を打破せん事を力めた、等しく此の天地間に生れて、其間に貴賤貧富の別のある理由がないといふ所から、財産平分説も起れば共產論も顯はれた。しかし尙深く研究を積んで見ると中々そんな事は行はれぬ。假りに今日平等にした所で、明日から直ぐに又等差を生ずることは、勢ひ免れ難い事で、これは海面の波をなくして、常に平滑ならしめんと欲すると同一である。併し機會の平等といふことは、何うしてもなければならぬ、是れは今日大いに世間に首肯せられたる説になつて居る。單に此の人は門地がよいから遊んで居つても出世が出来る、此の人は貧家に生れたから幾ら勉強しても一生芽が出ない、そんな不公平な社會組織はいかぬ。素より人々の才の長短體力の強弱に依り差等の出来るのは仕方がないが、併し働けば働いただけの効能が現はれると

いふ事だけは是非ともなければならぬ、人々が各自の機會を捕へ得ることは平等にならなければならぬといふ一點に、社會學者の説が歸着して來た様子に思はれる。

而して今日の社會は、此の理想を去る事甚だ遠いものであるが、併し舊幕時代に比べると決して同日の論ではない。之に由て見れば、先づ今日迄商業學校に於て勉強し、一と通りの事を覺えた處で世の中に出る、それから互ひに機會を促へるのであるが、併し機會を促へるといつても、猫が鼠を促へるやうに狙つて居つても仕方がない。又昔の豪傑連が、常に脾肉の生ずるを嘆じつつ時節の到來を待ち、一生に一度は大いにやつて見る杯といふ流義では全く駄目である、矢張り毎日々々致々汲々として勉強し、時々刻々寸分を進めて遂に其の目的を達するといふ方針でなければならぬ。商業學校は即ち此の優勝劣敗の大戦場に出陣する爲めの武器を授け、甲冑を装はせたので、是れを活用して如何に能く戦ひ、如何によく防ぐかは偏へ

に出身者の腕に在る。今日の文明社會の實業には、是非とも此の學校教育を要するので、決して昔日のやうな下稚奉公だけではないかぬとは、各國の競争上にも段々其の證據を認むるやうになつた。其の證據には商業教育の進歩した國と、進歩せぬ國とは其の間に大變な差が出来て居る。英國は世界の商業を獨占したえらい國であるが、徒弟教育のみで商工學校といふものは一向やらなかつた。是れに反して獨逸は近年に至つて大いに是れを昂めた結果、僅々二三十年間に驚くべき商業上の進歩を仕遂げたので、是れが大いに天下の耳目を驚かしたのである。全體獨逸が教育を以つて國力の發展を爲すに至つた濫觴は、佛國革命當時よりの事である。當時那翁第一世の爲めにプロイセン國は殆んど滅亡の悲況に陥り、内治外交共に命を佛國に仰がざるを得ぬ、全く手も足も出ないといふ有様で、武備を張る事も、商業を盛にする事も出来ず。實にプロイセンの國家是那翁の爲めに桎梏を倅められて、どうする事も出来なくなつてしまつたのである。そこで如何

にして此國の開運を促かすべきやに就ては、學者も政治家も殆んど策の出づる所を知らつたが、幸にして爰にフイヒテといふ哲學者があつて、此八方塞りの内に一徑の血路を見出した、即ち教育の一事である。流石に慧眼の奈翁も是れには氣付かなかつたと見へて、教育の事に就いては此國に向て別段に何等の干渉を加へなかつたのを幸ひ、フイヒテは、國を再建して將來の運命を開くには國民教育に若くはない、中等社會の者は命ぜずとも教育はする者として、下等社會の人民には是非教育を強制する事、兵制と同一にするより外はないといふ見識を立て、時の宰相スタインに建言し、スタインも亦大いに其の卓見に敬服し、喜んで此の説を納れたのが、今日の獨逸を現出せしむる一大動機となつたのである。のみならず此の教育が段々實業に適切なる方向に進んで、近來は職業教育が非常な盛況に達した。其結果獨逸人は歐米各國に入込んで、其の土人の職業を蠶食する、所謂獨逸人侵入の猛烈なるのみならず、極東の支那にまで勢力を張出して、彼の

支那商業の主人といはれた英人と競争し、漸次に蠶食して居るのである。一體獨逸人は廉く暮らして腰が低く、チヨット見のよい安物を買るから、貧乏な東洋の商賣には英人よりは都合がよい、其上彼等は只あくせく働くのであるが、之に反して英人は益々上品になつてしまつて、朝は漸く九時頃より店を開き、晝飯を食ふと先づ一時間は必ず休み、それから四時には店を閉ぢて仕舞ひ、運動服に着かへてテニスをやるといふやうな殿様流をきめて居る。獨逸人は歐羅巴の支那人といはれるだけに、人間は下等であるが稼いで儲ける點になると中々ゑらい。其の上に學校の教育が行届いて居るから萬事に都合がよいので、段々上等の地位を占めるやうに成つて來た。現に香港、上海等の有名な英人銀行は、主として英人の金で出來て居るにも拘らず、其の重役の顔ぶれを見ると獨逸人が却つて多數であるといふ。是れは何ういふ譯か。先づ英人最負の側の説では、英人は實力を持つて居りさへすれば虚榮は望まぬ、株券を持つて居りさへすれば、儲けた金

は配當に成りて自分に來るから、重役には獨逸人でも何でも役に立つ奴を使つて置けといふ大きな腹を有つて、表面は自分達の名前を出さぬ。政治の事でも其通りで、役人にはそれ相應の人物を擧げて置け、自分達は自由の本領を侵されさへしなれば夫れて宜い、何も役人になつてゑらさうな顔をせずとも宜いといふのが所謂アングロサクソン人の流義であるが、商賣にしても同様の考を持つて居るからだといふ。無論その邊もあらう、併しながら一方から考へると、是れは全く教育上に於ける優劣から起る事と思はれる。事實に於いて英人は今さういふ方面の教育が確かに缺けて居る。其の反對に獨逸は學校の教育、殊とに外國語其の他必要なる商業教育が開けて居るから、斯ういふ地位に立つて仕事をするのに極く都合がよい、都合の好い人を置く方が利益であるから勢ひ其の地位に立つ事になる。兎に角是れは商業教育の勝利を代表した現象であるといつて差支なからう。英國でも近來大いに其の邊に氣が付いたと見え、商業教育の聲が高くなつた。

英國でさういふ聲が高くなれば、實際に斷行して著々進歩することは明白である。米國でも追々東洋に向つて商業を發展しつゝあるから、何れから見ても日本の競争者は皆有力な國である。戦争に就いては英國も米國も大いに日本に同情を表して居るが、平和の戦争になると鎬を削つて戦はなければならぬ對手國である。それ故日本には益々商業教育が必要になつて來る、其の商業教育は先づ學科の上からいへば、主にも實際の上に必要な學科のみであるが、又一方に於いては人の品性を高めることが商業教育の目的でなくてはならぬ。人品を高める其初步は、正直にして嘘を言はぬ人、詐欺をせぬ人を養成するといふ事で、此の目的の下に養成された人物が商業に従事する様にならなければ日本の商業はどうしても振はぬ。英國が近來大いに東洋に於ける勢力を殺がれた事は確かな事實であるにも拘らず、尙ほ支那に於ける外國貿易總額の五割六分を占めて居る。其の大部分は實に英人の品性が高いからである。全く商賣の確實にして偽りのな

い事が、此の優勢を維持して居る事は明らかな事實で、此の點は獨逸は遙に劣つて居る。そこで我が日本も是れから商業國として大いに發展せんとするには、大いに品性を磨き、獨人の智識と、英人の人格とを兼備すること心掛がなくてはならぬ。此の覺悟がなかつたらば到底商業界に雄飛する事は望まれぬ。然るに従來商賣人になるには品性は要らぬ、學術も要らぬ、唯だ店に坐つて掛引を覺へさへすれば宜い、丁稚奉公から成上がつて行けばよいといつて居たが、是れては到底品格ある大商人になれぬ、是れ迄の日本流の店の教育ではどうしても駄目である。例へば今一人の小僧を金銀傍職或は時計屋といふやうな店に入れて置けば、其の小僧は藝も覺える、金銀の扱ひ方や、眞贋を見分けることも覺える、いや眞贋を見分けるだけではない、もう一步進んで贋物を眞物に通用させやうといふ魔術まで覺える。金銀細工の傍屋などが筭の打換へに金銀の目方を盗み、時計屋が上等の時計の直しをする時に、機械の磨滅防ぎの寶石を外づしてガラスと入換

へるなどは、當然の事として是れを行ひ、鍍金の鎖なり指環なりの賈物を眞物にして賣付る、それは見た處では何うしても本金としか見えぬ、それは切つて見てもチャンと中が金に見える、目方を計つて見てもチャンと正金と變らぬやうに出來て居る。そんな出物を買ふ時には無論偽物だから廉く買ひ、人を騙して眞物として高く賣る。それも素人に賣らず黒人に賣る。よく停車場や橋際に店を出して居る小さな兩換店杯に持つていつて、是れを買つて下さい、是れは本金で目方が何匁ある、切つて見ても宜しいといふので中を見ると矢張其の通りの色になつて居る、目方も重い、とうとう眞物にして賣込んでしまふ。さあ賣つて來ると大手柄として賞められる、丁度猫が鼠を捕つて來たやうなもので、親方も大喜び、ウム能く賣つて來た、褒美に一圓遣るといつたやうな譯で泥棒の分け前をやる、それで小僧も得意、主人も得意である。今日ではマサカこんな馬鹿な手に乗るものはなからうと思ふが實際どうだか怪しむのである、兩替屋などにも随分悪い

事をするものがあつた。例へば東京近在の田舎でも、開けぬ農家などでは金銀の比較相場は知らぬ、そんな人が事によると、昔から二分金を袋に入れたやつを佛壇にしまつて持傳へて居たのを町へ賣りに來る事がある、かういふ人を騙すのはまるで赤ん坊の手を捻るやうなもので、怪しげな小兩替店にはけしからぬ不正手段を採つたものが多かつたやうである。今でも随分甚だしい不徳義な事が行はれて居ないとも限らぬ。以上は單に金銀其の物にさへ詐偽を行ふといふ一例を示したので、一般の物品賣買上に就いては更に甚しいものがある。爰に不問に附すべからざる悪弊は、彼の交通機關の如き、荷主から信託された物品を運送するのであるから、出來るだけ完全に保管して届けなければならぬ、是れがまた其の國の品位と進度を代表するものであるが、爰に外國の例をいふと、道がに英國は鐵道に荷物を預けても其の儘ほり込んだなりで決して間違はないので有名である。是等の點に於いてあまり評判のよくない伊太利を予が歩いた時には、停車

場で手荷物を托すると、御丁寧にも鞆の周圍に紐を掛けて、錠かした鉛で其の結目を塗つて仕舞ひ印形を押す、是れは荷物の蓋を開けられないやうに封をするので、其の理由を聞くに、近來伊太利鐵道係員には、客の荷物を盗む者が多くある、のみならず荷物の中から抜き取るものもある。其れを防ぐ爲めに封をするのであると云ふたか、恰度其の時分の新聞の記事を見たら、此の數ヶ月に六十人許り此の犯罪の爲めに捕まつた。是れが皆裁判所に送られたが、その答辯は皆千遍一律であつた。それは即ち給料が少ないから據ろなく斯ういふ事をするといふのだ、陪審官は是れを有理と認め、皆無罪を言渡したと書いてあつた。給料が少いから客の物を取るのは當然であるとは驚くの外はない。

併し日本でも此事に就ては餘り笑ふ譯にはゆかぬ、昔から和船の船頭は積荷の内から何でも物を抜くことが役得になつて居た。酒を積むと其の樽に錐穴を穿けて幾分か取り、米を積んでも竹串を入れて幾分か抜く、是れは

船頭の役得として誰も怪しまぬ。ひとり和船の船頭ばかりではなく、汽船でも汽車でも矢張やるといふ事が時々事實に現はれる。折角遠國の友人が、心を籠めて送つて呉れた進物が、こちらに着く頃にはずつと數が減つて來る、悪品と入換つて着く、甚だしきは林檎の代りに石ころが詰つて來る事がある。現に或る鐵道會社に居た人の談話に、其會社のある驛長の細君は、始終家に居つて良人の辨當殼の歸つて來るのを、毎日の楽しみとして待つて居た、何ういふ譯かといふに、其の辨當の殼を開けると屹度何か好い物が出て來る。何か旨いものが出て來るか、子供のおもちゃか何か出て來る。或る時ヒョイと開けると、鰻がニョロ／＼這出して板の間を匍ひ廻つて、どうしても捕かまらないので大いに困つたと云ふ話しもあつた。決して和船の船頭ばかりでなく、文明の利器を働かして居る人間にも此の悪風は行はれて居る、誠に情けない次第ではないか。それならばどうして夫れを改めるかといふに、舊來の人間を其の儘にして置いては駄目だ、此の様

な人は悪い事と思はずにやつて居るので、如何に説法しやうが演説しやうが到底効能がない。畢竟するに、全く品性も教育もない人間が交通機關の職に當つて居るが爲めに斯んな弊風が行まれて居るので、秩序ある教育を受けた人々が是等の仕事に當るやうになれば、無論此等の弊風はどんなに破壊されてゆく、即ち新しい空氣が其の場所を充たして行くから、古い、腐つた空氣等はどしどし排除せられる。乃ち交通金融商工の諸機關に、新教育を受けた人物を供給して、實業界を一洗しなければ日本の進歩は期し難い。是れは商業學校の希望であると同時に、世間の實業家中には、具眼の人士は大いに此の點に氣が付いたやうであるから、出身者も亦此の抱負を以て社會に出て、各々其の職に勉むべきは勿論である。終りに一言したい事は、社會の事物は甚だ複雑したもので、種々人々の利害の關係や、情實が纏綿して居るから、決して竹を割るやうに簡單に行くものでない。故に餘り一直線に突抜けやうとすると忽ちに蹉跌して仕舞ふ、随分時には

腕曲に迂廻しても宜しいから、歩々其の目的に向つて進み、自己の榮達を圖ると、同時に、社會の改進に大に資益するといふ覺悟が極めて肝要であると信ずる。

獨立自尊

終

明治四十四年九月十五日印刷
明治四十四年九月二十日發行

獨立自費

定價壹圓七十錢

不許複製

著作者

鎌田榮吉

發行者

增田義一
東京市京橋區南紺屋町十二番地

印刷者

佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發兌元

東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社

發兌元

電話京橋八七四番、八七五番 郵便振替貯金口座番貳六番
東京市芝區三田二丁目慶應義塾內
慶應義塾學報發行所

現代の名著

法學博士農學博士
實業之日之編輯顧問
新渡戶稻造先生著

大版上製箱入美本
定價壹圓七錢七郵稅二十錢

著者は多年教育に従事し常に青年の指導者となり又以て自ら之を天職となす本書は實に混沌たる我思想界の指針たるべく多年心血を傾注して著はされしもの、全篇悉く處世の大教訓也、説明の切實材料の豊富且つ多趣味なる眞に稀世の名著也世の不平不安に驅らるゝ者及向上發展を望む者速に本書に就かれよ。

修養の經典

實業之日本社發行圖書總目錄

史傳地理書類

- 農法學博士新渡戶稻造君序 山方香峯君著 **十大德教家傳** 大版上製 正價貳圓七錢
- 若宮卯之助君著 **米國史** 大版上製 正價貳圓七錢
- ルーズヴェルト原著 法學博士遠山照君山崎梅處君共譯 **偉人クロムヴェル** 大版上製 正價貳圓
- 農法學博士新渡戶稻造君序 山方香峯君著 **新武士道** 大版上製 正價貳圓
- 岡三慶君著 **新武士道實話** 大版上製 正價貳圓
- 山方香峯君著 **一人近世人傑傳** 大版上製 正價貳圓
- 山方香峯君著 **世界豪傑の片影** 大版上製 正價貳圓
- 報知新聞記者 佐瀬解樓君著 **當代の傑物** 大版上製 正價貳圓

- 實業之日本記者 石井白露君著 **功十傑** 大版上製 正價貳圓
- 最近米國 **偉人の少年時代** 大版上製 正價貳圓
- 中野親象君著 **新外國商業地理** 大版上製 正價貳圓
- 宮田千年君著 **世界商業史綱** 大版上製 正價貳圓
- 大隈伯序 福川琴月君新著 **世界偉人傳** 大版上製 正價貳圓
- 加藤政之助君著 **滿洲分處** 大版上製 正價貳圓
- 長谷川宇太治君著 **渡清案内** 大版上製 正價貳圓
- 市吉徹夫君著 **地理と商品** 大版上製 正價貳圓
- 大隈伯序 三宅有賀田中簡博士道懷文 **天下の記者** 大版上製 正價貳圓

鈴木光次郎君著
●現代名家流奇談 全中一册版 郵正稅價四卅錢

桑谷克堂君著
●成功富豪の面影 美一册版 郵正稅價五拾錢

實業之日本社編纂
●日本富豪の家風 美全一册版 郵正稅價五拾錢

京都大學圖書部員 佐竹義雄君編
●末勤王烈士手翰抄 金上文字入製 郵正稅價四拾五錢

前カラチン女學堂教頭 一宮操子女士著
●蒙古土產 金大阪文字入製 郵正稅價八拾錢

●經濟產業書類

專修學校法政大學教師法學士 工藤重義君著
●經濟財政要義 金大阪文字入製 郵正稅價四拾錢

米國エケルストン氏著 藤川忠雄君譯
●處世經濟法 全中一册版 郵正稅價四卅錢

米國イリ博士 クキツク博士共著
●經濟學提要 金大阪文字入製 郵正稅價八拾錢

米國ゼンクス博士原著 別府五太郎君譯述
●產業合同論 金大阪文字入製 郵正稅價八拾錢

商業學士小林行昌君 土屋長吉君共著
●中等經濟學 全大一册版 郵正稅價四拾錢

土屋長吉君著
●應用經濟學 全大一册版 郵正稅價四拾錢

淺井藤侃君著
●新農業經營 全大一册版 郵正稅價四拾五錢

宮入長右衛門君著
●經濟的育蠶法 全大一册版 郵正稅價卅五錢

カーネギー翁著 伊藤重次郎君譯
●富の福音 全洋一册裝 郵正稅價四拾錢

川上善兵衛君著
●葡萄提要 金大阪文字入製 郵正稅價四拾錢

法學博士 天野爲之君新著
●經濟策論 金大阪文字入製 郵正稅價四拾五錢

●衛生書類

醫師 武藤著作君著
●家庭應急手當法 全中一册版 郵正稅價四拾錢

報知新聞記者 中村木公君編
●名家長壽實歷談 金中文字入製 郵正稅價八拾錢

東京朝日新聞記者 杉村縱橫君著
●肺病全快談 全中一册版 郵正稅價五拾錢

農學博士 玉利登造君著
●冷水浴の實驗と學理 全中一册版 郵正稅價廿五錢

萬朝報記者 中島氣輝君著
●禁酒禁烟の五年間 全大一册版 郵正稅價廿五錢

醫學博士 加藤照勝君校閱 西谷龍顯君譯著
●最新育兒法 美全一册版 郵正稅價七拾錢

英國ノールソン著 海嶽生譯
●思想健全法 全中一册版 郵正稅價四拾錢

藤川忠雄君著
●心機轉換法 全中一册版 郵正稅價廿五錢

●商業實務書類

英國グラングキル博士著 海嶽生譯
●簡易安眠法 全中一册版 郵正稅價廿五錢

英國グラングキル博士著 海嶽生譯
●神經健全法 全中一册版 郵正稅價廿五錢

藤川忠雄君著
●頭腦明快法 全中一册版 郵正稅價廿五錢

英國グラングキル博士著 藤川忠雄君譯
●最新記憶法 全中一册版 郵正稅價廿五錢

醫學士 樺田十次郎君著
●衛生十二月 全小一册版 郵正稅價四拾錢

米國ウクレター、デー、ムツァーイ著 堀内新泉君譯
●店頭新販賣術 全大一册版 郵正稅價五拾錢

金澤商業學校長中野觀象君編 山田觀成君書
●實用商業文練習帖 全中一本字 郵正稅價四拾錢

土屋長吉君著
●商戰必勝 全中一册版 郵正稅價卅五錢

土屋長吉君著 **商工執務法** 全大 一册版 正價五拾六錢
 カネキ一君著 伊藤重次郎君譯 **實業の鍵** 全大 一册版 正價卅五錢
 前金澤商業學校長 永野耕造君著 **商業修身訓** 三上 中册下 正價四拾五錢
 中野觀象君著 **商業書信文範** 大版全二册 正價四拾六錢
 商業學士 小林行昌君著 **英國商用文教科書** 大版上製 正價四拾五錢
 カネキ一君著 小池靖一君譯 **實業の帝國** 附新評傳 正價卅五錢
 カネキ一君著 伊藤重次郎君譯 **富の福音** 全洋 一册裝 正價四拾八錢
 男爵前島密君序 澤村菊池兩君共著 **國民實業指針** 全大 一册版 正價五拾八錢
 岡秀太郎君著 **商品と其荷造法** 全大 一册版 正價五拾八錢
 密崎貞夫君著 **生命保險提要** 全大 一册版 正價五拾六錢
 市吉徹夫君著 **銀行と會社** 全中 一册版 正價廿五錢

土屋長吉君著 **商品と商業經營** 全中 一册版 正價卅五錢
 土屋長吉君著 **最新販賣術** 全中 一册版 正價五拾六錢
 土屋長吉君著 **商業繁榮策** 全中 一册版 正價五拾六錢
 土屋長吉君著 **最新商業要綱** 正價 並製七拾五錢 各郵八錢
 土屋長吉君著 **簡易商業學** 上下二册 正價四拾八錢
 中野觀象君著 **最新外國商業地理** 大版上製 正價五拾八錢
 宮田千平君著 **世界商業史綱** 大版上製 正價六拾八錢
 男爵 後藤新平君序 西村正雄君著 **最新事務法** 全中 一册版 正價六拾六錢
 商業學士 小林行昌君 下平精一君共著 **英國商業事務** 大版上製 正價四拾二錢
 實業之日本記者 都倉義一君著 **最新式記帳法** 全大 一册版 正價七拾八錢
 中野觀象君著 **野觀象式簿記** 全大 一册版 正價卅五錢

千代田生命保險會社會計課長 興石丑太郎君著 **利廻早見表** 全大 一册版 正價卅五錢
 近江屋質店員 奥村喜一郎君著 **實業讀本** 和美全一册 正價卅五錢
 五十嵐次郎君著 **最新商業算術** 全上 文字入 正價八拾八錢
 西岡英夫君著 **商賈と勘定** 全中 一册版 正價四拾八錢
 中野觀象君 高間昭君共著 **商業書信活法** 全大 一册版 正價五拾八錢
 竹内正太郎君著 **商業簿記獨習書** 美並上 本製 正價八拾五錢
 竹内正太郎君 村塚玄君共著 **最新商業簿記** 全大 一册版 正價六拾六錢
 市吉徹夫君著 **地理と商品** 全中 一册版 正價廿五錢
 朝鮮日日新報社著 **百圓の渡韓成功法** 全中 一册版 正價三十五錢
 桑谷克堂君著 **成功富豪の面影** 美全 一册 正價五拾六錢
 篠田鐵造君著 **小僧學問** 抽振假名 正價四拾錢

西岡英夫君著 **立身と繁昌** 全中 一册版 正價廿五錢
 在米 柿西藤一郎君著 **米國の商店** 全中 一册版 正價五拾六錢
 藤川忠雄君著 **品性の勢力** 全大 文字入 正價八拾四錢
 米國前大統領ルーズヴェルト氏原著 山崎梅造君譯述 **ルーズヴェルト全集** 全大 文字入 正價八拾四錢
 藤川忠雄君著 **自助の精神** 全中 一册版 正價卅五錢
 波多野烏峯君著 **新自助論** 全中 一册版 正價五拾六錢
 岡三度君著 **新武士道實話** 全上 文字入 正價八拾錢

修養書類

波多野島峯君著 ●健全なる常識 金大版上入製 郵正稅價八壹錢圓	蘆川忠雄君著 ●沈着心修養 金中一册版 郵正稅價卅五錢	蘆川忠雄君著 ●交際術修養 金大版上製 郵正稅價八壹錢圓	樋口配天君著 ●默想 金中一册版 郵正稅價卅五錢	蘆川忠雄君著 ●日常の言語 金中一册版 郵正稅價卅五錢	蘆川忠雄君著 ●人格の鍛鍊 金中一册版 郵正稅價卅五錢	高須梅溪君著 ●偉人修養の徑路 金中一册版 郵正稅價卅五錢	雨宮敬次郎君著 ●奮闘吐血錄 金中一册版 郵正稅價卅五錢	蘆川忠雄君著 ●意志の鍛鍊 金中一册版 郵正稅價卅五錢	蘆川忠雄君著 ●讀心術修養 金中一册版 郵正稅價卅五錢	蘆川忠雄君著 ●克己心の修養 金大版上入製 郵正稅價八壹錢圓
實業之日本記者 岳淵生著 ●品性の光輝 金中一册版 郵正稅價卅五錢	米國トマス、ラーチング氏著 ●不平慰安法 金大版一册版 郵正稅價卅五錢	蘆川忠雄君著 ●觀察力修養 金中一册版 郵正稅價卅五錢	英國フナリス氏著 蘆川忠雄君譯述 ●雄健の氣象 金中一册版 郵正稅價卅五錢	堀内新泉君著 ●自彊術 金中一册版 郵正稅價卅五錢	蘆川忠雄君著 ●決斷力修養 金中一册版 郵正稅價卅五錢	實業之日本臨時增刊 ●勇者の世界 金大版一册版 郵正稅價卅五錢	實業之日本臨時增刊 ●人格の修養 金大版一册版 郵正稅價卅五錢	實業之日本臨時增刊 ●新時代の奮闘 金大版一册版 郵正稅價卅五錢	佛國大間屋主人ヒエール氏著 前田越嶺君譯述 ●商才修養の實驗 金中一册版 郵正稅價卅五錢	

江口岳東君著 ●人格の光輝 金大版一册版 郵正稅價六拾錢	獨逸マイアー氏著 波多野島峯君譯 ●樂天の勝利 金大版一册版 郵正稅價四拾錢	實業之日本記者 岳淵生著 (公開狀) ●新時代の青年 金中一册版 郵正稅價四拾錢	文學博士 井上哲次郎君校閱 植村道次郎君著 ●教育勅語要義 頗大版一本 郵正稅價卅五錢	米國マードン翁著 波多野島峯君譯述 ●快活なる精神 金中一册版 郵正稅價四拾錢	法學博士和田垣謙三君序 蘆川忠雄君著 ●人生の慰安 金大版一册版 郵正稅價五拾錢	島田三郎君序 蘆川忠雄君著 ●常識の修養 金大版一册版 郵正稅價五拾錢	男爵 瀧澤榮一君序 蘆川忠雄君著 ●實務才幹訓練 金大版一册版 郵正稅價五拾錢	男爵 前島密君序 蘆川忠雄君著 ●人生の奮闘 金大版一册版 郵正稅價五拾錢	英國男爵 エリツベリ卿 ラボツク共氏著 正木照藏君譯 ●人生の妙味 金大版上入製 郵正稅價八拾錢	伯爵 大隈重信君序 蘆川忠雄君著 ●樂天の生活 金大版一册版 郵正稅價五拾錢
野田叱電君著 ●成功青年立身訓 金中一册版 郵正稅價四拾錢	蘆川忠雄君著 ●失敗の活用 金中一册版 郵正稅價四拾錢	高橋男爵 波多野島峯君著 ●青年自尊の修養 金大版一册版 郵正稅價八拾錢	藤原楚水君編 ●先哲座右銘全集 金中一册版 郵正稅價八拾錢	海老名正君著 ●新國民の修養 金上文字入製 郵正稅價八拾錢	ルーズヴェルト氏著 山崎梅處 松宮春一郎君共譯 ●奮闘の教訓 金大版一册版 郵正稅價四拾錢	農學博士法學博士 新渡戸稻造君著 ●獨立的自尊 箱上入製 郵正稅價四拾錢	慶應義塾々長 鎌田榮吉君著 ●立自尊 箱上入製 郵正稅價四拾錢			

語學數學書類

- 高橋五郎君著 英語正確使用法 上文字入 正價六拾錢
- 上海同文書院校友 谷原孝太郎君著 日清英會話 紙上入 正價八拾錢
- 高橋五郎君著 英語熟達法 全中一册 正價五拾錢
- 高橋五郎君著 英語句讀法 全中一册 正價六拾錢
- 米國理學博士 大木新三君 鈴木精一君共著 代數難問詳解 上文字入 正價七拾錢
- 渡邊德兵衛君 小里進八君共著 實用珠算教科書 全大一册 正價五拾錢
- 高間、上田、中宮三君共著 最新珠算全書 全大一册 正價卅五錢
- 五十嵐次郎君著 最新商業算術 上文字入 正價八拾錢

婦人家庭書類

- 京都師範學校教諭 木内菊次郎君著 花むすひ 全大一册 正價五拾錢
- 梅田、堀、葉、菜、君著 折衷新案菓子製法 全大一册 正價五拾錢
- 報知新聞記者 中村水公君編 實話婦人のかみ 全大版上入 正價七拾錢
- 武藤喜作君著 家庭應急手當法 全中一册 正價四拾錢
- 實踐女學校講師 長谷川岩吉君述 刺繡獨習法 全大一册 正價卅五錢
- 京都師範學校教諭 木内菊次郎君著 折紙と圖畫 全大一册 正價卅五錢
- 山方香峰君著 生活衣食住 全大版上入 正價四拾錢
- 梅田、堀、葉、菜、君著 家庭菓子製法 全大一册 正價五拾錢

- 村井、齋、君著 婦人の日常生活法 特別上製 壹圓廿錢 郵稅拾貳錢
- 石塚月亭君編 弦齋夫人の料理談 第一編 三册 正價各六拾錢
- 東京職工學校教諭 本間鶴治君著 俗家庭理科 全大一册 正價七拾錢
- 西谷龍顯君著 質問に答の答 全中一册 正價二拾錢
- 堀内新泉君著 娘に與る母の書簡 前編四拾錢 後編五拾錢 郵稅八錢
- 報知新聞記者 天野誠齋君編 家庭日常の實驗 全大一册 正價四拾錢
- 米國女學記者 ベン氏著 實業之日本社翻譯 女子處世訓 十三餘頁 正價卅五錢
- 赤堀吉松、赤堀幸吉、赤堀菊子三君共著 日本料理法 全大版 正價七拾錢
- 婦人世界臨時增刊 衣裳かがみ 全大一册 正價五拾錢
- 西谷龍顯君著 婦人の重寶 全大一册 正價五拾錢
- 加藤醫學博士校閱 西谷龍顯譯 最新育兒法 全大一册 正價七拾錢

- 中島文學博士序 長野縣高等女學校校長波多野市松君著 子供の研究 全大版上入 正價七拾錢
- 三輪田眞佐子女史序 阿部長吟君著 健全なる家庭 全中一册 正價廿五錢
- 實業之日本社編纂 日本石油會社計課長 竹田常治君著 實用家計簿記 全大一册 正價四拾錢
- 婦人世界臨時增刊 食物かがみ 全中一册 正價四拾錢
- 婦人世界臨時增刊 婦人の慰藉 全中一册 正價四拾錢
- 婦人世界臨時增刊 樂しき婦人 全中一册 正價四拾錢
- 木内菊次郎君著 應用紙細工 全大一册 正價五拾錢
- 白井恰子女士著 家庭衛生料理法 全大一册 正價五拾錢
- 松葉靜和女士著 造花實習 全大一册 正價六拾錢
- 下田歌子女士著 婦人常識の養成 全大一册 正價四拾錢

●**諸流盆石指南** 評石齋文雅君著 全大一册版 正價六拾八錢

●**兒童淚** 讀賣新聞家庭記者 中村秋人君著 全中一册版 正價參拾五錢

●**家事實習法** 天野誠齋君著 全大一册版 正價四拾六錢

●**婦人の新修養** 米國婦人ウツハルコックン女史原著 三津木春影君譯 全大一册版 正價五拾八錢

●**婦人及男子の參考** 村井弦齋君著 全大一册版 正價拾八錢

●**新手工科教授法** 木内菊次郎君著 全大一册版 正價卅五錢

●**家庭教育の仕方** 文學士 畑田相爾君著 全中一册版 正價卅六錢

●**大和撫子** 井上民子女史著 全大一册版 正價四拾五錢

●**少女讀本** 村井弦齋君著 全大一册版 正價拾壹圓

●**情と躰** 讀賣新聞家庭記者 中村秋人君著 全中一册版 正價四拾六錢

●**花の葉** 木村 勉君 編 全大一册版 正價四拾五錢

●**少年旅行** 三津木春影君譯 全中一册版 正價四拾六錢

●**夏やすみ** 東草水 川端龍子合作 全中一册版 正價四拾六錢

●**婦人禮法** 下田歌子女史著 全大一册版 正價四拾五錢

●**婦人の心理** 家庭新報主筆 村田天賴君著 全大一册版 正價六拾八錢

●**少女美談** 日本女子商業學校講師 渡邊白水君著 全大一册版 正價七拾五錢

●**實用園藝全書** 富益、鈴木、田中三君合著 箱上入製 正價四拾五錢

●**處世書類** 前田越嶺君著 全大一册版 正價五拾八錢

●**生存競争法** 藤川忠雄君著 全中一册版 正價卅五錢

●**最良の機會** 藤川忠雄君著 全中一册版 正價卅五錢

●**紳士と社交** 岡田孝吉君著 波多野烏峯君譯 全中一册版 正價七拾八錢

●**向上的處世法** ジョーンソン氏著 山崎梅處君譯 全大一册版 正價五拾八錢

●**日常の言語** 藤川忠雄君著 全中一册版 正價卅五錢

●**光榮ある生涯** ミラー博士著 波多野烏峯君譯 全中一册版 正價四拾六錢

●**處世術修養** マシュー博士著 江口岳東君譯 全大一册版 正價四拾六錢

●**樂天の生活** 藤川忠雄君著 全大一册版 正價五拾八錢

●**新時代の奮闘** 實業之日本臨時增刊 全大一册版 正價卅二錢

●**樂天的處世法** 實業之日本臨時增刊 全大一册版 正價卅二錢

●**成功座右銘** 實業之日本臨時增刊 全大一册版 正價拾六錢

●**逆境離脱策** 男爵 辻 新次君著 波多野烏峯君譯 全大一册版 正價八錢

●**處世經濟法** 米國エグレストン氏著 藤川忠雄君譯 全中一册版 正價四拾四錢

●**處世の標準** 波多野烏峯君譯 全中一册版 正價卅五錢

●**富豪實驗教訓** 英國リッチー氏著 山崎梅處君譯 全大一册版 正價六拾八錢

●**同情的勢力** 實業之日本臨時增刊 全大一册版 正價卅二錢

●**社會側面觀** 波多野烏峯君著 全中一册版 正價七拾八錢

●**處世座右訓** 實業之日本臨時增刊 全大一册版 正價四拾四錢

●**成功錦囊** 實業之日本臨時增刊 全中一册版 正價四拾四錢

●**應對談話法** 藤川忠雄君著 全中一册版 正價卅五錢

●**人生の真相** ゼローム氏著 波多野烏峯君譯 全中一册版 正價四拾六錢

●**世教訓** 米國富強グラハム翁著 實業之日本臨時增刊 全大一册版 正價四拾八錢

●**英文處世教訓** 米國ジョン、グラハム翁著 (右の原著) 全中一册版 正價卅五錢

●**處世の金科玉條** 實業之日本臨時增刊 全大一册版 正價卅二錢

河原智俊君著
 四書處世經典
 袖珍上製
 正文參拾六錢

● 雜書類

大勳位伊藤公題字 大隈伯自序 江森泰吉君編
 ● 大隈伯百話 大版上製 正文貳圓八拾錢
 米國エール大學教授哲學博士 朝河貫一君著
 ● 日本の禍機 全一册版 正文五拾八錢
 實業之日本記者 橋澄生著
 ● 獨笑珍話 袖珍美本 正文四拾六錢
 伯爵大隈重信君 島田三郎君序 三宅盤君著
 ● 都市の研究 金文字入 正文七拾八錢
 山崎梅處君譯述
 ● ルーズヴェルト全集 大版上製 正文八拾四錢

● 最新刊書籍

木村勉君編
 ● 古挿花の葉 大版上製 正文壹圓五拾錢
 三津木春影君譯
 ● 少年旅行 全一册版 正文四十六錢
 實業之日本記者編
 ● 優等學生勉強法 美袖本 正文四拾錢
 在米 梯西藤一郎君著
 ● 米國の商店 全一册版 正文五拾六錢
 實業之日本記者 東草水君 川端龍子君共作
 ● 夏やすみ 全一册版 正文四十六錢
 婦女新報主筆 村田天賴君著
 ● 婦人の心理 全一册版 正文六十八錢
 日本女子商業學校講師 渡邊白水君著
 ● 少女美談 郵上製 正文七十五錢
 下田歌子女士著
 ● 婦人禮法 大版美本 正文四十五錢
 實業之日本記者編
 ● 衛生十二ヶ月 美袖本 正文四拾錢
 加治木常樹君編
 ● 西郷南洲書翰集 大版上製 正文九拾八錢

英國リチャードソン氏著 實業之日本社譯述
 ● 最新讀書法 全一册版 正文四十六錢

山方香峰君著
 ● 讀書便覽 美四本版 正文四拾錢
 實業之日本社編
 ● 東西發奮の動機 金文字入 正文壹圓八拾錢
 佐藤青吟君著
 ● 學生の前途 全一册版 正文卅五錢
 大隈伯序 永井柳太郎君著
 ● 英人思想の記 全一册版 正文八拾八錢
 高須梅溪君著
 ● 滑稽趣味の研究 全一册版 正文六拾錢
 文學士 藤田篤君著
 ● 實用文字便覽 上袖製 正文五拾五錢
 實業之日本社編
 ● 優等學生勉強法 美袖本 正文四拾錢
 加治木常樹君編
 ● 西郷南洲書翰集 大版上製 正文九拾八錢

● 實用園藝全書

富益、鈴木、田中三君合著
 ● 實用園藝全書 箱上入製 正文壹圓七拾錢
 慶應義塾々長 鎌田榮吉君著
 ● 獨立自尊 大版上製 正文十二錢
 農學博士法學博士 新渡戸稻造君著
 ● 修養 箱上入製 正文十二錢
 誠實新聞記者 松川二郎君著
 ● 南洋 美中本 正文五拾六錢
 手紙雜誌主幹 桑田春風君著
 ● 家庭書簡 美中本 正文七拾錢
 實業之日本記者 東草水君 島田元磨君合作
 ● 青い鳥 美中本 正文四拾錢
 少女の友主筆 星野水裏君著
 ● 新詩瀆 美小本 正文廿五錢
 文學士 岩佐重一君著
 ● 烈婦の面影 上大製 正文七拾八錢
 鹿島櫻卷君著
 ● 江藤新平 上大製 正文七拾八錢
 高須梅溪君著
 ● 新時代普通文 目下印刷中
 婦生著
 ● 名士奇聞錄 目下印刷中
 早稻田大學講師 土屋長吉君著
 ● 實踐會計整理法 目下印刷中
 藤原祿次君著
 ● 地方青年團體及事業 目下印刷中

新渡戸博士顧問問

實業之日本

▲最良の健康最新の智識最強の人格を以て活
▲世界に突進奮闘せんと欲する者の好師友▼

- ▲新渡戸博士が新時代の處世、慰安、向上の新教訓每號掲載
 - ▲増田社長の實驗と學理による日常生活の活教訓每號掲載
 - ▲新時代の新智識を内外に探究し趣味ある方法にて每號紹介
 - ▲新成功者の勇敢壯烈なる苦戰奮闘實歴は每號本誌の特色
 - ▲現代共通の大問題職業難に對して常に鄭嘖親切に解釋す
 - ▲新時代の新人物を紹介し且つ銳利痛快なる活評論を加ふ
- ◎青年 學生……實業家 教師……軍人……皆愛讀す

每月二回（一日十五日）
一冊拾五錢 郵税壹錢
半年分定期刊及郵税
共壹圓五拾五錢 一年
分春秋增刊刊稅共參圓
郵券代用は一割増

日本一の

婦人世界

一冊拾五錢 郵税壹錢
◎毎月一回一日發行
◎半年分定期刊稅共
壹圓五錢 一年分同貳
圓五錢

本誌は每號左の如く婦人必讀の文字滿載

- ◎婦人の常識は斯くして養成すべし
- ◎良人を助けて成功したる婦人の苦心
- ◎子女の教育に苦心せる婦人の實話
- ◎姑に仕へて孝養至らざるなき嫁の話
- ◎女學生に最も必要なる心の修養
- ◎良人に感謝さるる妻の内助の功
- ◎大難に遭うて婦人の覺悟すべきこと
- ◎結婚前の注意と妻となる用意
- ◎美貌と健康を得べき最新醫學の進歩
- ◎食物の料理と女中の使ひ方の實驗
- ◎各方面の婦人の實驗と婦人界の新現象
- ◎古今に互る文藝の作品と評釋
- ◎科學を通俗に説明した話
- ◎實用的なる弦齋夫人の料理談
- ◎歴史に現はれた賢婦孝女の話
- ◎讀者文藝(短文、和歌俳句等)
- ◎婦人界に於ける最新の流行
- ◎婦人界に於ける主なる出來事
- ◎習字と繪畫の懸賞募集
- ◎女中紹介欄(一切無手数料)
- ◎育兒問答齒科問答と文藝問答
- ◎美しき彩色口繪と珍らしき寫真

文章平易體裁優美

本誌は村井弦齋下田歌子女史 每號執筆

誠は必ず人の心に透徹す

空前の大好評を博せ本誌は左の内容を有す

▲大臣大將その他朝野名士の少年時代の實話を掲ぐ……趣味と教訓とに溢る
 ▲博士學士その他日本有数の學者の學藝談を掲載す……蓋し知識の無盡藏也
 ▲軍人その他冒險家の血湧き肉躍る冒險實話を掲ぐ……士氣を鼓舞する多大
 ▲各小學校長の訓話及び模範的生徒の善行を紹介す……小年發奮の絶好龜鑑

日本少年
 一 本 模 範
 的 誌 雜 年 少

日本少年

一冊拾錢 郵稅
 ○○每月一回一日發行
 ○○春秋二回増刊半年
 分増刊郵稅共七十錢
 一年分一圓三十五錢

▲少年小説冒險小説その他落語等趣味の文字に富む……以て精神を爽快にす
 ▲本誌獨得の三色版彩色版寫真版は美麗壯麗を極む……樂園に遊ぶの想あり
 ▲小學校教科書及び文部省令と嚴密なる連絡を保つ……瑣事尙ほ苟くもせず
 ▲記事材料の豊富にして變化に富む事他に比類なし……好評また偶然に非ず

▲本誌は教科書と共少年の讀まざる可から雑誌な

最善最良の少女雜誌

少女の友

一冊十錢 郵稅一錢
 △每月一回一日發行
 △春秋二回増刊發行
 △半年分増刊共七冊
 郵稅共七十錢△一年
 分十四冊一圓卅五錢

◎材料の集輯と選擇の爲に金力勞力の最上を盡すは本誌
 ◎記事の調和と排列とに苦心する事本誌の如きは日本一
 ◎新らしき知識を與ふると同時にたのしき娛樂をそなふ
 ◎決して嘘をつかぬ少女時間を正確に守る少女を養成す
 ◎汚い猜疑心や醜い嫉妬心なき玉のやうな少女を養成す
 ▲現代第一流の女流教育家下田歌子女史毎號執筆

誠は必ず人の心に透徹す

▲空前の大好評を博せる本誌は左の内容を有す▼

▲大臣大將その他朝野名士の少年時代の實話を掲ぐ……趣味と教訓とに溢る
 ▲博士學士その他日本有数の學者の學藝談を掲載す……蓋し知識の無盡藏也
 ▲軍人その他冒険家の血湧き肉躍る冒険實話を掲ぐ……士氣を鼓舞する多大
 ▲各小學校長の訓話及び模範的生徒の善行を紹介す……小年發奮の絶好龜鑑

日本少年
 一 本 日
 的 範 模
 誌 雜 年 少

日本少年

冊拾錢郵稅
 ○每月一回一日發行
 ○春秋二回増刊半年
 分増刊郵稅共七十錢
 一年分一圓三十五錢

▲少年小説冒險小説その他落語等趣味の文字に富む……以て精神を爽快にす
 ▲本誌獨得の三色版彩色版寫眞版は美麗壯麗を極む……樂園に遊ぶの想あり
 ▲小學校教科書及び文部省令と嚴密なる連絡を保つ……瑣事尙ほ苟くもせず
 ▲記事材料の豊富にして變化に富む事他に比類なし……好評また偶然に非ず

▲本誌は教科書と共に少年の讀る可から雜誌なり▼

最善最良の少女雜誌

少女の友

冊一十錢郵稅一錢
 △每月一回一日發行
 △春秋二回増刊發行
 △半年分増刊共七冊
 郵稅共七十錢△一年
 分十四冊一圓卅五錢

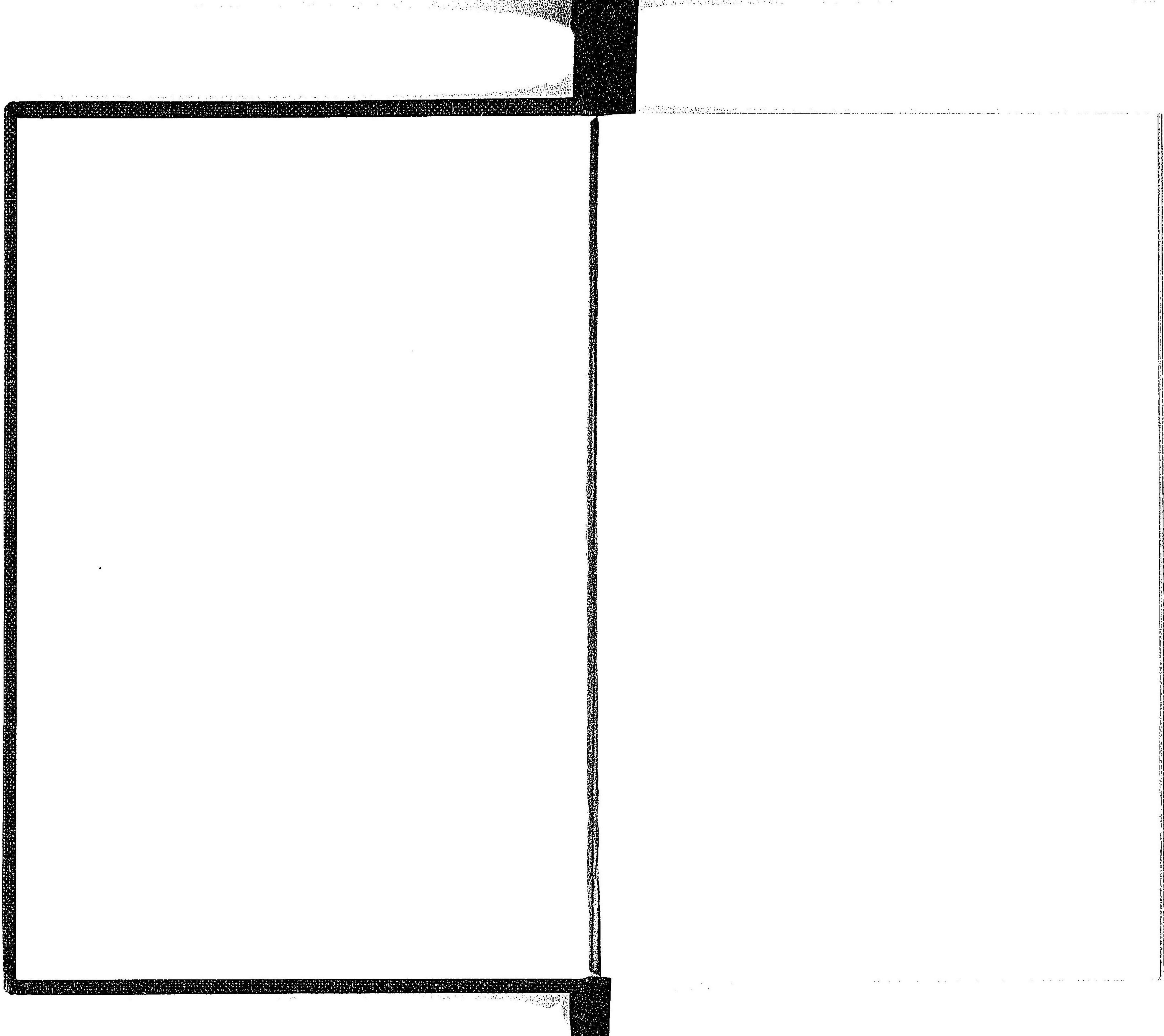
◎材料の集輯と選擇の爲に金力勞力の最上を盡すは本誌
 ◎記事の調和と排列とに苦心する事本誌の如きは日本一
 ◎新らしき知識を與ふると同時にたのしき娛樂をそなふ
 ◎決して嘘をつかぬ少女時間を正確に守る少女を養成す
 ◎汚い猜疑心や醜い嫉妬心なき玉のやうな少女を養成す
 ▲現代第一流の女流教育家下田歌子女史毎號執筆

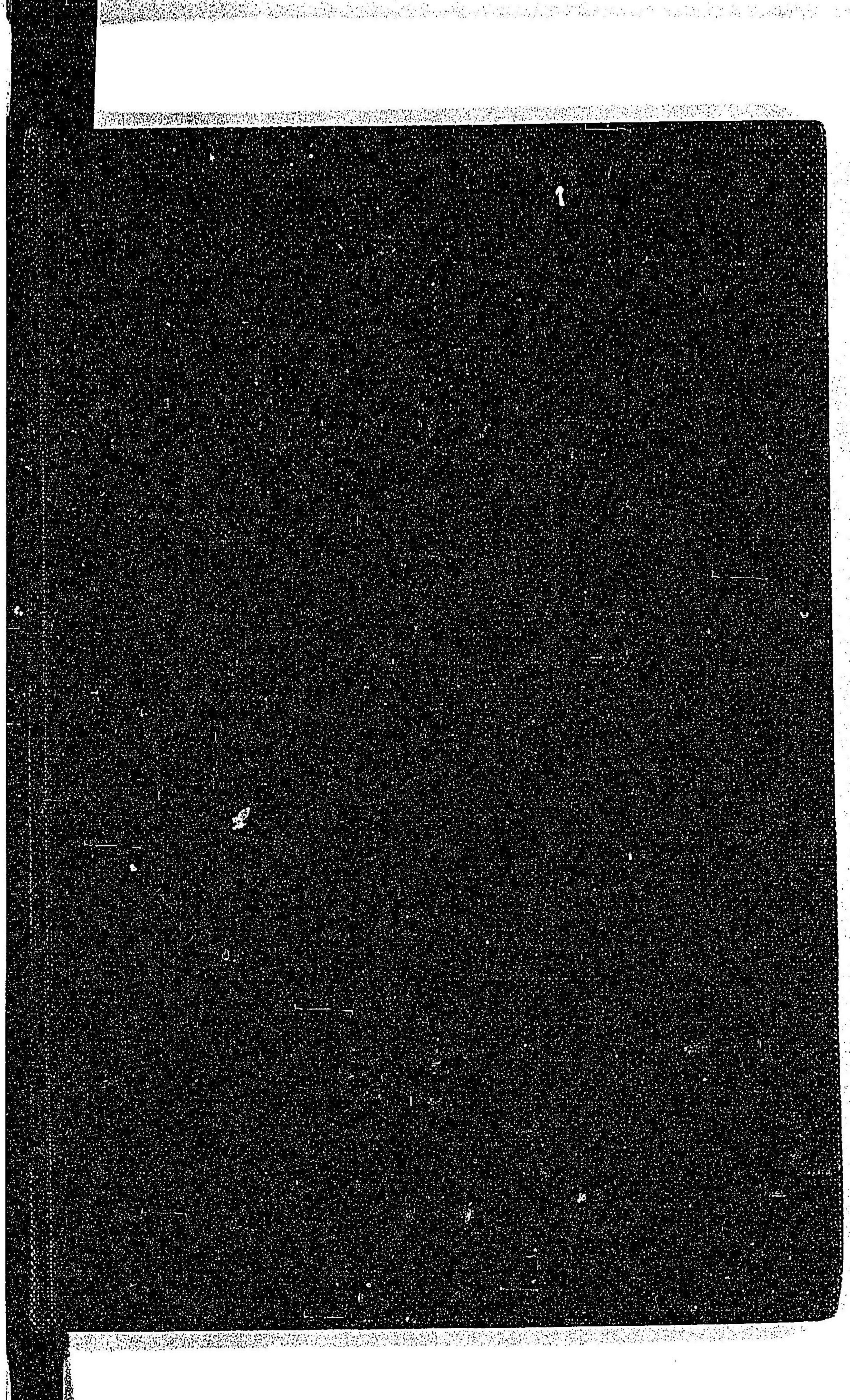
て 就 に 誌 本 の 一 本 日

幼 年 の 友

△一 定 價 拾 錢 郵 稅
△每 月 一 回 一 日 發 行
△六 冊 郵 稅 共 五 拾 錢
△十 二 冊 同 壹 圓 拾 錢

△父さん曰く幼年の智情意を偏頗なく圓滿に發育さす様に出來てゐる雑誌である
△母さん曰く初めから終ひまで美しい彩色繪があつて面白いお話が澤山あります
△兄さん曰く平易な假名文章と綺麗な繪に依て極めて健全な教育をする雑誌だよ
△姉さん曰くハメ繪もあればボンチ繪もあり繪探しもあるので家庭向きですねえ
△坊ちゃん曰く僕はこんないい雑誌を見たことがない眞個に日本一の雑誌だねえ
△嬢さん曰くアア面白いわ爲になつて面白いお喋ばかり眞個にいい雑誌だねえ
△先生曰く教科書以外に於て興味と利益とを最も完全に具備せるものはこの雑誌
△伯父さん曰く單に子供ばかりに面白いのではなく大人にも老人にも凡て面白い
△伯母さん曰く本誌さへあれば毎日幼稚園へやらなくていいくらゐてございます
△乳母曰く私達は本誌がある爲どんなに助かるか知れませんが眞個に爲になります
△記者曰く幼年の友は東洋幼稚園々長岸邊福雄氏が主宰してゐるのでございます





335
293

102179-000-9

335-293

独立自尊

鎌田 栄吉/著

M44

EAF-0177



